

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集

たくさり
田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡
たくさりだあと
たくさりくるまどうまえ
発掘調査報告書

宮古西道路建設事業関連遺跡発掘調査

【第2分冊】

田鎖車堂前遺跡 本文・附編

田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡
発掘調査報告書
【第2分冊】

2020

2020

岩手県沿岸広域振興局土木部
(公財)岩手県文化振興事業団

田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡 発掘調査報告書

宮古西道路建設事業関連遺跡発掘調査

【第2分冊】
田鎖車堂前遺跡 本文・附編

目 次

【第2分冊】 田鎖車堂前遺跡 本文・附編

VII 田鎖車堂前遺跡の調査

1 概要と層序	1
(1) 調査概要	1
(2) 基本層序と遺構面	2
2 中世後半以降の遺構と遺物	6
(1) 近世の遺構	6
(2) 中世後半の遺構	8
(3) 中世後半以降の遺物	10
3 中世前半の遺構と遺物	11
(1) 中世前半の遺構	11
(2) 中世前半の遺物	17
4 古墳時代～古代の遺構と遺物	25
(1) 竪穴住居	26
(2) 祭祀遺構	42
(3) 土坑	43
(4) 溝	43
(5) 古代の土器	43
(6) 古墳～飛鳥時代の遺物	46
(7) 金属製品	47
(8) 古代以降の土製品・石製品	48
5 弥生時代・縄文時代後晩期の遺構と遺物	49
(1) 弥生時代の遺構	49
(2) 弥生時代の遺物	50
(3) 縄文時代後晩期の遺物	52
6 縄文時代中期の遺構と遺物	53
(1) 竪穴住居	53
(2) 埋設遺構	62
(3) 配石遺構	62
(4) 大形木柱列	65
(5) 貯藏穴	66
(6) 粘土採掘坑	66
(7) 陷し穴	66
(8) 縄文時代中期の遺物	66
7 縄文時代早期の遺構と遺物	71
(1) 竪穴住穴	72
(2) 土坑	72
(3) 縄文時代早期の遺物	72

VIII 総 括

1 時期区分と成果	185
2 田 鎮 の 牧	187
3 平泉期の居館	188
(1) 構 造 分 析	188
(2) 成 立 と 終 焉	188
(3) 機 能 と 性 格	188
(4) 平泉との関係	190
4 古代の集落	191
(1) 集落と土器	191
(2) 一 片 の 瓦	192
(3) 水 辺 の 祭 祀	193
(4) 集落成立前夜	193
5 弥生時代の遺物様相	194
6 縄文時代中期の様相	195
(1) 住 居 と 集 落	195
(2) 集 落 内 祭 祀	197
(3) 土 器 の 分 析	208
7 縄文時代早期末の様相	209
(1) 壁穴住居の構造	209
(2) 土 器 の 分 類	209
8 ま と め	210

附編 自然科学的分析・測定

1 田鎮車堂前遺跡土坑内土壤分析	215
2 田鎮車堂前遺跡火山灰同定	221
3 田鎮車堂前遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	227

第2分冊 図版目次

第1図 調査区平面	1
第2図 層序と遺構面	5
第395図 居館想定図	189
第396図 平安時代の推定航路と田鎮の地	191
第397図 各地から搬入された弥生土器	195
第398図 縄文時代の住居時期区分	196
第399図 縄文時代中期の土器分類 (1)	198
第400図 縄文時代中期の土器分類 (2)	199
第401図 縄文時代中期の土器分類 (3)	200
第402図 縄文時代中期の土器分類 (4)	201
第403図 縄文時代中期の土器分類 (5)	202
第404図 縄文時代中期の土器分類 (6)	203
第405図 縄文時代中期の土器分類 (7)	204
第406図 縄文時代中期の土器分類 (8)	205
第407図 縄文時代中期の土器分類 (9)	206
第408図 縄文時代中期の土器分類 (10)	207
第409図 縄文時代早期の土器変遷案	211

第2分冊 表目次

第1表 土師器・須恵器 (B) 一覧	75
第2表 弥生土器 (C) 一覧	117
第3表 縄文土器 (D) 一覧 -後期・晩期-	122
第4表 縄文土器 (D) 一覧 -中期-	122
第5表 縄文土器 (D) 一覧 -早期末葉-	142
第6表 縄文土器 (D) 一覧 -早期中葉-	147
第7表 磁器 (E) 一覧	148
第8表 陶器 (F) 一覧	149
第9表 金属製品 (G) 一覧	153
第10表 石製品 (H) 一覧 -古墳時代以降-	158
第11表 石製品 (H) 一覧 -縄文時代-	159
第12表 銭貨 (I) 一覧	160
第13表 かわらけ (A) 一覧	161
第14表 土製品 (J) 一覧 -古墳時代以降-	162
第15表 土製品 (J) 一覧 -弥生・縄文時代-	163
第16表 石器 (K) 一覧	164
第17表 その他の遺物 (L) 一覧	184
第18表 田鎮車堂前遺跡の時期区分	186

VII 田鎖車堂前遺跡の調査

1 概要と層序

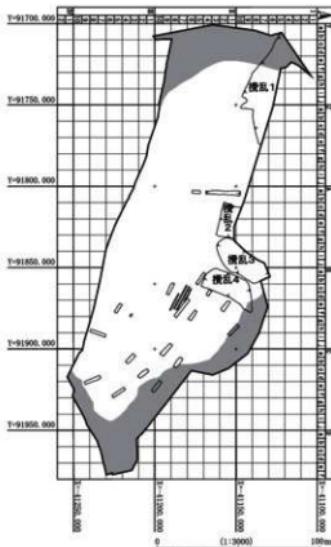
本節では、田鎖車堂前遺跡の発掘調査の概要と調査区内における基本層序について記述し、次節以降の検出遺構・出土遺物についての報告を補助する。

(1) 調査概要

遺跡は田鎖遺跡の東に隣接する。また、遺跡の東側を流れる長沢川を挟んで対岸には、松山館跡がある。3遺跡の中で最も標高の低い地点に立地する。調査範囲は東西方向に長く延び、中央東寄り部分はインターチェンジ予定地に該当するため周辺用地よりも大幅に拡張した範囲となっている。調査区の最大東西長は約280m、最大南北長は約110mである。標高は最も低い東端で6m、最も高い東側で7mである。調査範囲内のうち西端部と東部に低湿地が掛かっており、それらが調査範囲外南側で繋がるものと思われる。これは、調査範囲の南側にある現在の農道と水路が自然地形を反映した曲線であると考えられ、低湿地に囲まれた微高地に遺跡が展開しているものと推測される。このことは調査範囲内の大部分が畑で、調査範囲外の南側には水田が広がっていることも考え合わせると、本来の地形と現代の土地利用が合致する。遺跡の成り立ちを考えるうえで重要な景観である。

河川に接した沖積平野であるため、遺構面は時代によって異なる複数の遺構面が確認できる。この遺構面を意識した調査をおこなったが、堆積層の把握は非常に難しく、遺構面の把握不十分なまま遺構が検出されることも度々あった。また、調査中に輪郭が見えず、検出することができなかつた遺構もあったのではないかと危惧している。遺構の半裁時に底面の認識が難しく、特に小規模の土坑や溝などは、しばしば底面を掘り抜いてしまうものもあった。

調査区内には大小数多くの擾乱が認められる。大規模なものとしては、調査区北西部に造成工事によるものであると考えられる擾乱1がある。掘削して土壤を入れ替えたような痕跡が広範囲に認められ、約2m掘削しても客土が認められるのみで、本来あった遺構は消滅している。調査区中央北端には、約20×10mの範囲で擾乱2がみられ、内部には巨大なコンクリートが多数廃棄されていた。掘削深度も2mを遙かに越えており、廃棄物が巨大であるため除去は不可能であると県教委立ち会いのもと掘削を断念した。擾乱近くに電柱や擁壁などが認められたため宅地があったと推測され、この造成前に掘削・廃棄されたものと考えられる。調査区中央の北西部では、調査開始前に事業者の委託で誤って工事業者が重機で掘削してしまった擾乱3がある。掘削深度は約2mに及び、この範囲の遺構の大半は失われたものとみられる。



第1図 調査区平面

が、堀下半部には掘削が及んでいなかった。擾乱2と擾乱3に挟まれたエリアでは南北方向に無数の農耕のトレッチャー痕跡が認められ、古代の遺構面に深く刻まれていた（擾乱4）。その他、調査区東半には県教委による調査前に掘削された試掘トレンチがある。

遺構は縄文時代早期末～近世まで多数検出され、その中でも特に縄文時代早期末・中期の竪穴住居を主体とする集落、縄文時代中期の配石・列石を含む祭祀空間、奈良～平安時代前半の竪穴住居を主体とする集落、平安時代末（12世紀）の堀で囲まれた居館、中世の掘立柱建物や竪穴建物からなる集落、近世の掘立柱建物や畠などからなる営農集落と、各時代ともに非常に多くの考古学的な知見を得ることができた。遺物も古くは縄文時代早期中葉の土器から近世の陶磁器に至るまで多種多様なものが出土した。特に、この場所が集落域となっていた時代についての遺物は、質量ともに良好で、この地域を代表する考古学的な資料群である。

(福島)

(2) 基本層序と遺構面

基本層序と遺構面については、図（第2図）に示した通りであるが、図では説明不足であることを考え、補足的に説明を加える。

調査区は道路用地に該当し、東西に長く伸びる範囲である。大まかに述べると、地形は遺跡の東に流れる長沢川に向け徐々に低くなる傾向にある。長沢川は閉伊川に合流するが、遺跡は低位段丘から長沢川の氾濫原に立地する。そのため調査範囲内においては、東側ほど沖積作用による堆積が厚く、西側ではその堆積が薄くなる。ただし、調査区最西端は低湿地が南北方向に走っており、より低くなっている。この低湿地部分が現在の宮古市道花輪線と重なり、東側に隣接する田舎遺跡との境界を成している。このような沖積層を主体とする層序が連続と形成されており、沖積層中には基本的に小礫すら存在せず、洪水作用によって粗い砂が運ばれて定着した様子も窺うことができない。シルトを主体とする沖積層が、この遺跡における土質に関する最大の特性である。

基本層序は大別10層に区分される。このうち、少量でも遺物が出土するのはI～IV・VI～VII層であり、V・IX・X層は無遺物層である。なお、この基本層序は自然現象や気候などを大きく反映しており、地域の有史以来歴史的な自然環境を知る上で貴重な知見を多く内包する。調査中にあっても台風や大雨による長沢川の氾濫や平時の湧水に悩まされた経緯があり、遺跡の立地と閉伊川および長沢川との関係を絶えず考えさせられた。

田舎車堂前遺跡Ⅰ層

表土に該当する層序である。細分すると上下に区分でき、上位をIa層、下位をIb層とする。いずれも地点や地籍の違いによって微妙に様相がそれぞれ異なる。

Ia層は概ね黒褐色シルトを主体としており、調査直前まで畠として利用されていた大半の地点で草本類の根が蔓延しており、柔らかな現在の作土層である。部分的に現代の造成盛土なども認められるが、これもIa層に含めることとした。表土中には比較的遺物の混入が少なく、表面採集でも中世以前の遺物を採取できない。道路建設計画以前に「周知の遺跡」として登録されていなかったのは、このことに一因があるものと思われる。近現代の耕作が、大半の地点で厚い堆積層に阻まれ、遺物包含層や遺構面に到達していなかったものと想像される。

Ib層は近世の遺物包含層である。黒褐色～暗褐色シルトを主体とし、部分的に砂粒が含まれることがある。近世・近代の作土となっている箇所もある。

田舎車堂前遺跡Ⅱ層

基本的には表土直下の作土層であり、古土壤である。細分すると上下に区分でき、上位をIIa層、

下位をIIb層とする。削平等により残存していない部分もある。

IIa層はわずかながら古代～中世の遺物を含む中世の遺物包含層である。黒褐色～暗褐色シルトであるが、I層よりもやや暗めの色調である。

IIb層は古代～中世前半の遺物を内包する遺物包含層である。調査区西側の低位部分では黄褐色～暗褐色シルト、調査区西側はほとんど残存していないが、一部で認められる。暗褐色シルトを基調とする。調査区の中央から東側の範囲は層厚が薄くなり、上下の層界も不明瞭となる傾向である。

田舎車堂前遺跡II層

基本的には表土直下の作土層であり、古土壤である。細分すると上下に区分でき、上位をIIa層、下位をIIb層とする。削平等により残存していない部分もある。

IIa層はわずかながら古代～中世の遺物を含む中世の遺物包含層である。黒褐色～暗褐色シルトであるが、I層よりもやや暗めの色調である。

IIb層は古代～中世前半の遺物を内包する遺物包含層である。調査区西側の低位部分では黄褐色～暗褐色シルト、調査区西側はほとんど残存していないが、一部で認められる。暗褐色シルトを基調とする。調査区の中央から東側の範囲は層厚が薄くなり、上下の層界も不明瞭となる傾向である。

近世遺構面

IIa層上面で近世の遺構が検出できる。調査では中央から東側で近世の柱穴や烟、肥前産染付碗が出土した土坑などを確認している。

中世後半遺構面

このIIb層上面が理論上は中世後半の遺構面であるが、実際的には上層や下層部分と峻別が困難である。また、検出した遺構が柱穴等時期不明の遺構であるため検証も難しい。

田舎車堂前遺跡III層

部分的に作土となっているが、基本的には自然堆積の古土壤である。細分すると上下に区分でき、上位をIIIa層、下位をIIIb層とする。削平等により残存していない部分もあり、西側の低湿地帯では、グライ化が進んでいる。

IIIa層は古代の遺物、特に土器・須恵器片を内包する遺物包含層である。稀に弥生土器や縄文土器がみられる。暗褐色シルトを基調としており、炭化物などの不純物が多く介在することがある。

IIIb層は弥生土器や縄文土器を内包する遺物包含層である。遺物を含むのは調査区東側に限定される。調査区西側では鉄分の沈着（おもに柱状ノジュール）や草木の根などが白化した状況が看取され、霜降りのような表面である。

中世前半遺構面

IIIa層上面が12世紀の遺構が検出される遺構面である。調査区東側では下面と区分可能であるが、調査区東側ではその区分が非常に困難であり、下面のIIIb層上面で古代の遺構と同時検出した。ただし、堀のような規模の大きな遺構の検出面では、II層から切り込む近世の烟の歛間の下部がみられるため古代の遺構面との差異はわずかながらも存在するようである。

古代遺構面

IIIb層上面が古代の遺構面である。7～10世紀の竪穴住居等が多く検出される。調査区どの地点においても遺構の判別は難しく、実際には純粋な遺構面よりも下げた面で遺構を検出している。このことにより、調査区東側調査時には弥生時代中期の遺構が一緒に検出されることもあった。

田舎車堂前遺跡IV層

自然堆積の古土壤である。III層よりも明るい色調のシルトである。黄褐色～褐色を呈し、混濁がな

く、不純物の介在もほとんど認められない。極少量の縄文時代晚期～弥生時代の遺物を内包するとみられる。実際にはこのIV層上面で古代の遺構の大半を検出し、調査した。

田鎮車堂前遺跡V層

調査区全域に厚く堆積した沼地堆積層の上部である。にぶい黄橙色から褐色を呈するシルトや粘質シルトが縞状に堆積している。この層中ではわずかに縄文時代晚期の土器片が認められた。断面の観察では、数度の地表面となった暗褐色シルトの土壤化面を確認できたが、その間の遺構は検出されない。自然現象として地震等による歪みが複数認められ、洪水・滯水と離水を幾度か繰り返している可能性が考えられる。周辺の景観として現在の田鎮・花輪地区の水田域となっている低地に湖（仮称であるが、以下、田鎮・花輪湖と表記）ができていたものと考えられる。

田鎮車堂前遺跡VI層

調査区全域に厚く堆積した沼地堆積層の下部で、調査区西側での層厚は約30cmである。褐灰色～にぶい黄橙色を呈する粘質シルトやシルト質粘土が縞状に細かく堆積している。田鎮・花輪湖の滯水が開始した頃の堆積物であると認識している。わずかに縄文時代中期の土器片や石器を含むため、縄文時代中期の遺物包含層でもある。

田鎮車堂前遺跡VII層

いわゆる黒ボクと呼ばれる腐植質風化火山灰土からなり、黒褐色シルトを基調とする古土壤である。上位から下位に向かって、色調は少しずつ漸移し明度が増す。調査では結果として上下2分できることが判明したが、土質や土色その境界は不明瞭である。報告書をまとめる上で必要に迫られ、上位をVIIa層、下位をVIIb層と設定した。下位に向かってやや淡い色調に漸移し、To-Cuが塊状に確認できる。周辺環境も含め、水の漬かない乾いた状態が継続していたと推測される。

縄文中期遺構面

VII層上面の縄文時代中期の遺構が検出できる遺構面である。VI層によって埋没している竪穴住居やVI層によって被覆された配石・列石も認められるため、このような遺構が中期集落の最終末期に当たると推測される。また、調査では配石遺構より下位で検出できる遺構（縄文時代中期）も存在するため、遺構面としては少なくとも上下2面が存在していたものと考えられる。

田鎮車堂前遺跡VIII層

いわゆる黒ボクと呼ばれる土壤の下位に該当する古土壤である。上位は暗褐色、下位は褐色シルトを基調とする。この層順をVIII層とした。縄文時代早期中葉や末葉の土器がいくらか含まれており、縄文時代早期末の遺物包含層であると認識できた。また、竪穴住居のような大形遺構の埋土として遺構内にも堆積している。

田鎮車堂前遺跡IX層

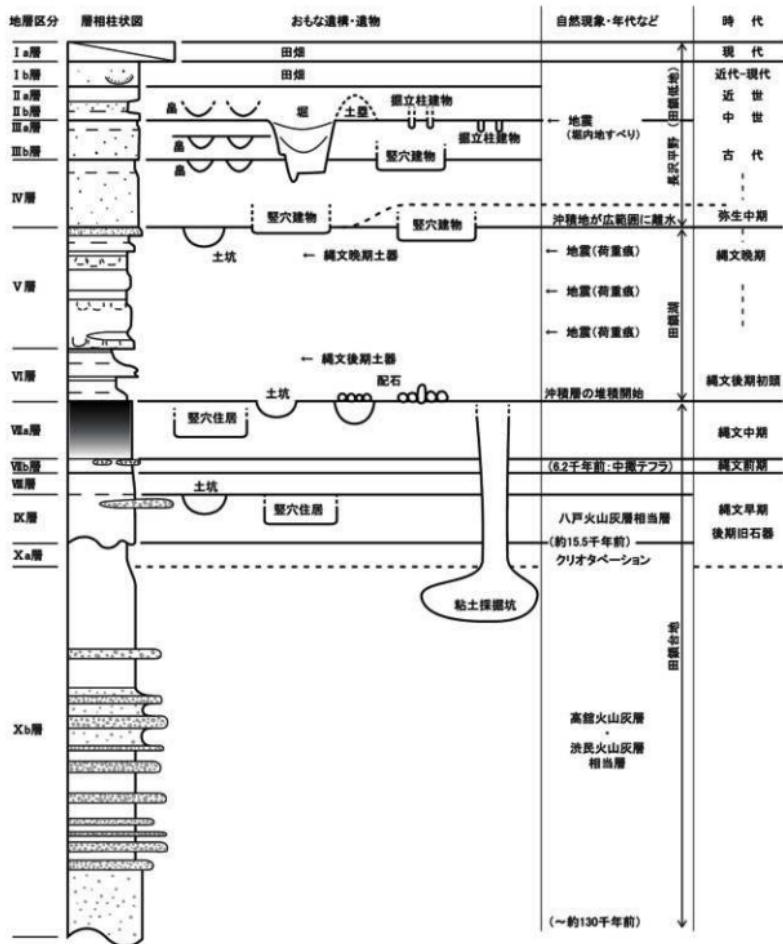
ローム質土であり、八戸火山灰相当のテフラが確認できる。比較的固く締まった黄褐色シルトを基調としており、色調の渋りや混入物はほとんど視認できない。

縄文時代早期末遺構面

IX層上面で縄文時代早期末の遺構を検出した。今回の調査における最終検出面である。面は下降しながら東へ広がると思われるが、調査区中央より東側では遺構が認めないと判断したため追跡していない。

田鎮車堂前遺跡X層

IX層同様にローム質土であるが、色調はより赤味が差しており、非常に固く締まっている。高鎌火山灰に相当すると考えられるテフラが認められる。中世前半の堀に伴う土橋の補強や土壁の構築土と



第2図 層序と遺構面

して用いられており、同様に、縄文時代中期の粘土探掘坑の対象土となっているようである。

以上、I～X層を基本層序として提示し、7面ある遺構面についても触れた。先に述べた通り、調査区西側は本来高位面にあるためこれら各層序が収斂現象によってすべて認められるが、調査区中央から東側にかけての低位面ではVII層以下の堆積が厚く、掘削深度が古代の遺構面から3mを越えるため把握できなかった。おそらく、現状ではVII層以下は限りなく標高0mに近似するのではないかと推測される。地盤の沈降を考慮しなければ、このようなエリアに縄文時代の居住域が広がっているとは考えがたく、また長沢川や閉伊川の氾濫原であったと思われる。

(趙・福島)

2 中世後半以降の遺構と遺物

(1) 近世の遺構

近世の遺構は、調査範囲のほぼ全面で認められたが、大半の遺構は簡易な記録に留めた。検出遺構の種類は、掘立柱建物・墓壙・畠などがあり、おもに17世紀後半～18世紀前半頃を中心とする農村の景観を推測できる。掘立柱建物は住家や小屋などから構成されており、墓壙は単独で存在せず複数で群を成す。畠は歛間が連続的に認められ、歛間の方向は東西方向と南北方向のものに大別でき、区域によって歛間方向が異なる。現代の地割とも概ね合致するようである。

掘立柱建物4(第8図) SB01

調査区中央よりやや東に位置する。長軸が約20°振った南北方向を指向する近世民家である。現代の耕作に伴う東西方向のトレンチャー痕4本および県教委試掘トレンチによって攪乱されているが、建物を構成する大半の柱穴を確認できたものと考えられる。柱穴はIIa層上面で検出可能であることを確認したが、調査ではIII層上面で検出した。柱穴の埋土はいずれも褐色シルトを主体とし、黄褐色シルトブロックを多量に含む褐色シルトが柱痕跡の内部を埋めている。建物は、直屋で内部に間仕切りが認められる構造である。想定される建物内の間取りは、建物北側に土間や台所が設けられ、南側が座敷となる平面配置を採用しているものとみられる。座敷は二間あるいはそれ以上の間取りが想像される。南東側には縁と考えられる半間分の張り出しが認められ、土間側で途切れている。この縁が途切れた部分は出入り口の可能性も考えられる。一方、西面には小規模な柱穴列が付属することから庇などの構造が想定される。柱穴から遺物は出土しなかったが、建物の形態や検出面からみて18世紀頃の民家の主屋であったと推測される。庇のある建物北東隅を玄関とするならば、西正面の建物となり、前面には畠と墓地があり、背面には屋外カマドなどがある小規模な庭が配置されていると思われる。

掘立柱建物5(第9図) SB02

調査区中央よりやや東に位置する。柱穴は11個で構成されており、いずれも柱穴中心部の柱痕跡には黄褐色や赤褐色のシルトのブロックが多量に混じった埋土がみられ、その他の柱穴とは検出時で容易に区別することができる。柱材が形を失った後に周囲から壁土などが混入したのかもしれない。この埋没過程は掘立柱建物4にも認められるため、近接する掘立柱建物4と併存し、同時期に廃絶していた可能性が高い。掘立柱建物1を主屋とした場合、この建物は主屋に付属する小屋などの建物であると考えられる。一見すると、平面は2間×2間の正方形の建物であるが、西側に2個の柱穴がわずかに突出するように加わる。これらはその他の柱穴よりも径が小さい。また、これらに挟まれる間柱についても同様に西側へわずかに突出し、建物本体の桁行よりも外方に位置する。この西側の突出部

はどのような構造を意味するのか不明であるが、埋土の共通性からみて同時に機能していたものと考えられる。

掘立柱建物6（第9図）SB501

調査区南東に位置する。複数の柱穴が溝2の完全埋没後に切り込まれ、溝埋土を切っている。梁間3間×桁行3間の建物である。短軸方向である梁間3間、長軸方向である桁行3間の平面長方形の建物である。梁間、桁行とも柱の個数は同一であるが、桁行の方が桁行よりも約1.2倍長い。長軸は北東方向を指向する。いずれの柱穴も柱痕跡が明瞭である。掘方埋土は暗褐色を主体とし、細かなブロック土が混入しており、柱材を据えた後に埋め戻されたものとみられる。柱穴から遺物は出土しなかつたが、埋土の特徴や遺構の切り合いから中世後半以降の建物であると考えられる。特異な平面形態であることから特殊な性格の建物である可能性が考えられる。

掘立柱建物7（第10図）

調査区西側に位置する。本来比較的高位面に該当するエリアであり、周辺および検出面は、現代の宅地造成等で削平や攪乱著しい状況であったが、削平によって露出したIX層上面で10個の柱穴を確認した。梁間2間×桁行3間の簡素な平面長方形の建物である。建物長軸は東西方向を指向する。柱穴の埋土はいずれも黒褐色シルトであり、炭化物が多く認められた。柱穴から遺物は出土しなかつたが、西側に隣接する田舎遺跡の掘立柱建物と同規格であり、近世の建物であると考えられる。

掘立柱建物8（第10図）

調査区南西、調査区際に位置する。II層上面で9個の柱穴を検出した。2間×2間の非常に簡素な建物である。南側調査範囲外にも延びる可能性も考えたが、その可能性は低いものとみられる。梁行方向はやや平面的な歪みが認められる。この柱配置で建物が完結しているとみられる。遺物は出土していないが、検出層位より近世以降の建物であるとみられる。性格は不明であるが、民家に付随する小屋であると考えられる。

区画溝3（第10図）

調査区東側に位置する。溝3、溝4などを切っている。方形を基調とし、「コ」の字形を呈する区画溝である。時期不明であるが、検出した溝は浅く、かなり上層より切り込まれ、その後の開発によって削平された可能性が考えられる。消極的であるが、近世以降の可能性が考えられる。

井戸4 SK229

調査区中央東側に位置する。IIIb層上面で検出したが、本来はそれよりも上位で検出されるものとみられる。溝2・溝3、古代の竪穴住居などを切っている。浅いが湧水著しく、平面正円形を呈するため井戸と想定した。出土遺物は古代の土器細片が出土した。切り合い関係から近世の遺構であると考えられる。位置から考えると掘立柱建物4の民家に帰属する井戸である可能性が考えられる。

井戸5 SE301

調査区西側、低湿地の中に位置する。平面円形であり、湧水著しく約1m掘削したところで断念した。埋土上層には多量の礫が混入しており、上部に石組がなされていた可能性が考えられる。埋土より近世の陶器片が出土した。

井戸6 SE801

調査区西側、低湿地の中に位置する。平面円形であり、井戸5同様湧水著しく約1.5m掘削したところで断念した。埋土の特徴から近世の所産であると考えられる。

近世墓群1

調査区中央の一角にまとめて分布する13基からなる墓塚群である。塚1や竪穴住居を切ってい

る。いずれも副葬された錢貨や煙管などが出土した。また、この地点のやや西側では、表土掘削中に墓石の台石などもみられたが、原位置を留めているものは皆無であった。近世民家である掘立柱建物4からみると比較的近い南西の一角に墓壙群は分布するため、この近世民家に帰属する墓地であったものと考えられる。この地点は、現代においても耕作されておらず、地籍上も不規則な小区画に地権者が多数であったため用地取得に手間取ったようである。このような土地の来歴からも近世以降、墓地として認知されつつ近代から現代に至ったことがわかる。

近世墓群2

調査区西側に位置する。現代の宅地跡のエリアであるため削平、攪乱著しく検出面は7層相当の面である。近接する掘立柱建物7に帰属する墓群であったと思われる。

(福島)

(2) 中世後半の遺構

鎌倉時代後半（13世紀後半）～織豊期（16世紀後半）までを概ね中世後半と区分した。この時期の遺構および遺物は調査区東西両端部にある低湿地に近いエリアで比較的多く認められる。検出した遺構は、掘立柱建物、竪穴建物、木樋を有する暗渠、畠などである。調査区内に分散する時代の特定できない溝・土坑・柱穴の中にもこの時期に帰属する遺構が含まれている可能性がある。

掘立柱建物9（第11図）

調査区東端部に位置し、東側低湿地に隣接する。身舎と下屋に分けられる。身舎は1間分の梁間に3間分の桁行がある。下屋は半間分の北側の張り出しである。下屋部分の柱穴SP510より洪武通寶が出土しており、中世後半の建物であると考えられる。

掘立柱建物10（第11図）

調査区中央西側や北寄りに位置する。梁間2間×桁行3間の簡素な建物である。遺物は出土しなかったが、検出層位からみて中世後半の建物であると考えられる。

掘立柱建物11（第11図）

調査区西側や南寄りに位置する。梁間2間×桁行推定4間の身舎に北側半間の下屋が付随する。柱穴はSP4168が堀2埋土上面から切り込むことから堀2埋没後の建物であると推定される。

竪穴建物4（第12図）

調査区東端部に位置する。検出面はIIb層上面であることを断面で確認している。隣接する竪穴建物5を切っている。長方形を基調とする平面形態であるが、南東辺に張り出しを有する。建物は焼失したと考えられ、炭化した屋根材などが焼け落ちた状態でまとまってみられた。炭化材は、概ね建物長軸方向に沿うように検出され、通常放射状に材がみられる古代の竪穴住居とは上屋構造が異なっている様子が看取される。炭化材直下には平坦な床面があり、床面では柱穴7個検出された。炭化材以外の遺物は出土しなかったが、検出層位、遺構の形態から中世の竪穴建物であるとみて間違いないと判断される。なお、検出した炭化材の一部を試料として用いたAMSによる年代測定結果では、13世紀の年代が提示された。

竪穴建物5（第12図）

調査区東端部に位置する。II層中で検出されたが、建物南側は県教委の試掘トレンチによって切られている。隣接する竪穴建物4によって一部を切られている。平面形態は方形あるいは長方形であると考えられる。炉は検出されなかったが、床面の土坑2基には鍛冶津が多く廃棄されていたことを考えると、鍛冶工房であると考えられる。鍛冶津以外の遺物は出土しておらず、詳細な時期の特定は難

しいが、隣接あるいは重複していたと考えられる中世前半の溝1に鍛冶溝が混入していないことから、溝1の埋没後に構築され、なおかつ、竪穴建物4の構築以前の鍛冶工房であると推測される。

竪穴建物6（第13図）

調査区中央西側に位置する。IIIb層上面で検出したが、本来はそれより上位で検出される可能性が考えられる。古代の祭祀遺構1と重複しており、祭祀遺構埋土の一部を床面としている。平面形態は長方形基調であるが、東側短辺は西側短辺に比してやや短い。柱穴等は検出されなかつたため、建物ではない可能性もある。遺物は出土しなかつた。

竪穴建物7（第14図）

調査区西側に位置する。IX層相当層の上面で検出した。同種の竪穴建物6を切り、さらに縄文時代の土坑を切っている。平面方形で、壁際に6個の柱穴が認められる。6個の柱穴は4隅と南北にそれぞれ1個で構成される。柱穴は比較的深く掘り込まれており、床面は平坦である。遺物は出土しなかつたが、中世後半から近世の遺構であると考えられる。建物ではない可能性もあるが、半地下式の室かもしれない。

竪穴建物8（第14図）

調査区西側に位置する。IX層相当層の上面で検出した。同種の竪穴建物5に切られ、縄文時代の土坑を切っている。平面方形で、壁際に5個の柱穴が認められる。5個の柱穴はいずれも壁際に配置されており、4隅と北側1個を確認した。柱穴は比較的深く掘り込まれており、床面は平坦である。遺物は出土しなかつたが、中世後半から近世の遺構であると考えられる。建物ではない可能性もあるが、半地下式の室かもしれない。

竪穴建物9（第14図）

調査区西側に位置する。IX層相当層の上面で検出した。堀1の一部を切っている。同種の竪穴建物6・7に近在する。平面方形で、壁際に7個の柱穴が認められる。9個の柱穴は4隅と南辺中央に2個、それ以外の辺にそれぞれ1個で構成される。柱穴は比較的深く掘り込まれており、床面は平坦である。遺物は出土しなかつたが、中世後半から近世の遺構であると考えられる。建物ではない可能性もあるが、半地下式の室かもしれない。

暗渠1

調査区最東端部に位置する。暗渠堀方はIIb層上面かIIa層で検出でき、堀方下端に木樋が据えられている。暗渠は「く」の字形に折れ曲がり、遺構北側と南側に広がる低湿地同士を繋ぐように延びる。暗渠堀方は北へ向かって下降し、低湿地を横切ることから、木樋内の水は南から北へと流れる仕組みである。流末が北側の低湿地へ延びていることから、排水の機能を持たせた暗渠である可能性が想定される。木樋はクリの丸太材を縱方向に裁断し、丸太内側を削り抜き、堀方内部で上下を合わせて設置され、埋設されたと考えられる。この暗渠唯一の屈曲部の木樋は、異なる太さの材を組み合わせ、差し込みによってジョイントされたものと推測される。この屈曲部については、流末へ向けて直線的に配置すると、掘立柱建物9範囲を貫くことになるため、これを避けた可能性が考えられる。堀方埋土より1点の瀬戸・美濃産大窯期の陶器片が出土しており、中世後半の15~16世紀頃の遺構である可能性が想定される。これは先述した掘立柱建物9の年代観とも矛盾しないことからも蓋然性の高い年代観である。

畠1

調査区最東端部に位置する。IIb層上面で暗褐色の連続する筋状の溝群を検出した。東西方向に長く延びる7条の畠間溝からなる畠である。溝1の埋土上面で検出でき、暗渠1に切られている。軸角は

東向きに軸線を取った場合、約50°北に振っており、暗渠1とは直交する。検出中に瀬戸・美濃大窯期の陶器細片が出土した。遺構の切り合い関係からみて、中世前半以降、中世末以前に耕作された畠の畝間群であると考えられ、概ね竪穴建物4と時期的に併行関係ではないかと推測される。

溝3（第15図）

調査区東側に位置する。IIIa層上面で検出したが、本来はそれよりも上層から切り込まれている可能性が考えられる。北西方向から北東方向に向けて延びる溝である。北東に広がる低湿地に直交する方向である。溝4など古代の遺構、中世前半の溝2などを多数の遺構を切っており、さらに近世の所産と考えられる柱穴などに切られている。時期を特定する遺物は出土しなかったが、遺構の切り合い関係から中世後半の溝であると考えられる。

不明土坑群

調査区東側に位置する。IIIa層上面で検出したが、これよりも上位から切り込んでいる可能性が考えられる。遺構の形態や埋土に一定の共通性が認められる24基からなる土坑群である。当初は中世のトイレ遺構の可能性を考え、埋土の土壤サンプルを分析委託したが、結果は糞便に関わる堆積ではないという内容であった。出土遺物がみられず時期不明であるが、古代（9世紀代）の遺構を切って存在しているため、中世以降の土坑群であると考えられるが、埋土の特徴から近世ではないと思われる。消極的な判断ではあるが、中世前半～後半の遺構であると考えられる。

（3）中世後半以降の遺物

この時期に帰属する遺物には、陶磁器や錢貨が出土している。近世の遺物は陶磁器や錢貨などが出土しているが、陶磁器類の大半は図および写真を割愛した。陶磁器は瀬戸・美濃産、肥前産、大堀・相馬産などの製品が多く出土している。中世後半の遺物は陶器片など東北地方産のものが出土している。磁器は中国大陸から輸入されたもので、龍泉窯青磁碗片や白磁皿などが出土している。出土した錢貨は銅製の北宋錢や明錢である。

磁器（第197図、写真図版189）

E20・21はいずれも青磁釉である。外面に連弁文が認められるが、明瞭な鍋が表出していない。E19までの12世紀代の青磁碗と異なり、厚みのある青磁釉が掛けられている。これらの特徴から13世紀の龍泉窯青磁碗であると考えられる。

E22は中国明代の染付碗であるが、近世肥前の染付碗である。白色の素地に、見込みには濃い藍色の草花文があり、透明釉が薄く均等に掛けられている。17世紀の所産とみられる。

E23は白磁皿である。口縁部は外反傾向である。比較的小形の器形であると思われる。

国産陶器（第193図、写真図版188）

F1～4は伊豆沼産陶器の破片である。伊豆沼産陶器片とみられる陶器片は約20片出土しているが、数個体分であるとみられる。また、瀬戸・美濃産大窯期の陶器片も複数出土している。いずれも微細な破片であるため図・写真是割愛した。今回は伊豆沼産陶器片の4点のみ図化し、掲載した。F2が甕である以外は、すべて鉢である。鉢はいずれも硬質に焼かれ、赤褐色を呈している。概ね13～14世紀の所産であると考えられる。

温石（第193図、写真図版188）

H1は滑石製の温石である。部分的に剥落しているが、概ね形状は把握可能である。長方形の板状に成形されているが、1側面のみ斜になっているようである。なお、剥落部分を勘案しても、貫通する孔は認められない。中世～近世の所産であると推察される。

錢貨（第195～198図）

I 1～32は中世の錢貨である。I 1～3は中世に広く流通する唐代の開元通寶である。背文は認められない。I 4～25は北宋錢である。I 15のみ欠損のため錢文不詳であるが、「元」の字形と配字から治平元寶か熙寧元寶であると推測される。I 26～31は明錢である。I 26～28は洪武通寶、I 29～31は永樂通寶である。I 32～39は銅錢の寛永通寶である。うちI 33～36は古寛永、I 37～39は新寛永である。

(福島)

3 中世前半の遺構と遺物

平安時代末（12世紀前半）～鎌倉時代初頭（13世紀初頭）を概ね中世前半と区分したが、中心となるのは12世紀代であり、この時代の遺構と遺物は、本遺跡を特徴付けるものであり、特に重要である。12世紀代の遺構は、堀で囲まれた内部と堀の外部でそれぞれ遺構が確認できる。堀内部域では掘立柱建物などの建物が検出された。掘立柱建物は中世後半や近世の建物とは異なり、柱筋の通りが良好である。12世紀代の遺物は陶磁器類とかわらけ、多種多様な鉄製品が出土している。

(1) 中世前半の遺構**掘立柱建物1（第21図、写真図版14）SB402**

調査区中央西寄り、堀1で囲まれた居館内部域に位置する。梁間2間、桁行3間の身舎の外周に約半間分の庇が巡る建物である。建物主軸は、概ね東西方指向を指向しており、建物南北方向と堀1南辺の方向はほぼ同一である。建物を構成する柱穴は28個で、各柱穴ともIV層上面で検出した。柱穴の一部が、奈良時代の堅穴住居埋土を切って構築されている。また、柱穴（P3）と土坑（SK451）は切り合いで認められ、P3北西が微かにこの土坑に切られている。なお、この土坑の埋土から渥美産陶器片が1点出土した。柱穴の埋土は柱痕跡が黒褐色シルト、柱堀方埋土は暗褐色シルトや黄褐色シルトを主体としながら各種ブロック土が混入する。柱穴の底面には柱当たりが明瞭に確認でき、底面中心部が光沢を持ちながら硬化しているものが多く、構造物の加重が柱穴底面に加わっている様子が認められる。柱痕跡が比較的明瞭であることから、廃絶後は柱の抜き取りあるいは自然腐朽によって埋没したものと思われる。各柱穴より建物の時期を特定するような遺物は出土しなかったが、建物の平面形態より中世前半に位置付けられ、堀1と併存していたものと考えられる。また、渥美産陶器片出土の土坑に切られていることからも12世紀代の建物である可能性が考えられる。庇を有する建物は堀内部域においてこの建物のみであること、土塁の施された区域内に位置することなどを考慮すると、堀1で囲まれた居館内部で比較的重要な役割を果たした建物であることが推測される。

掘立柱建物2（第22図）

調査区中央西寄り、堀1で囲まれた居館内部域に位置する。掘立柱建物3の西に隣接する。梁間2間、桁行4間のいわゆる総柱建物と呼ばれる形態である。建物の平面形態は長方形であると考えられる。建物長軸方向の主軸は、概ね南北方向を指向しており、建物主軸方向は隣接する掘立柱建物3とほぼ同一で、掘立柱建物1と直交方向にある。建物を構成する柱穴は15個で、各柱穴ともIIIb層上面で検出した。柱穴の一部が、古代の堅穴住居埋土を切って構築されている。柱穴の埋土にぶい黄褐色シルトおよび暗褐色シルト主体で、柱痕跡は不明瞭である。各柱穴より建物の時期を特定するような遺物は出土しなかったが、建物のあり方から中世前半に位置付けられると推定した。建物の位置から掘立柱建物1と密接な関係があるものと推測されるが、機能および性格は不明である。

掘立柱建物3（第22図）

調査区中央西寄り、堀1で囲まれた居館内部域に位置する。掘立柱建物1と掘立柱建物2に挟まれるように存在する。梁間2間、桁行3間の身舎の南辺に約1間分の下屋が取り付く形態である。建物の平面形は長方形で、長軸方向は掘立柱建物2とほぼ同一方向の南北方向である。一方、隣接する掘立柱建物1とは直交するような主軸方向である。建物を構成する柱穴は12個で、各柱穴ともⅢb層上面で検出した。柱穴の一部が、古代の堅穴住居埋土を切って構築されている。柱穴の埋土にぶい黄褐色シルトおよび暗褐色シルト主体で、柱痕跡は不明瞭である。各柱穴より建物の時期を特定するような遺物は出土しなかったが、建物のあり方から中世前半に位置付けられると推定した。建物の位置から掘立柱建物1と密接な関係があるものと推測されるが、機能および性格は不明である。

堅穴建物1（第23図、写真図版15）SI208

調査区中央、堀1で囲まれた居館内部域に位置する。古代の堅穴住居、土坑と重複しており、これらを切っている。Ⅲb層上面の古代の遺構と同一面で検出しが、本来はそれより上位面で検出される遺構である。検出当初は、古代の堅穴住居であると想定して調査を進めたが、掘削中に埋土から陶磁器片が認められ、周辺の古代の堅穴住居とは床面レベルが深いことから、古代よりも新しい時期の遺構であると認識を改めて調査をおこなった。平面長方形を呈し、長軸は北東方向を指向する。埋土上位は多くの小礫が混入していた。側壁は急角度で立ち上がり、床面は平坦である。床面側壁際には部分的に小規模な周溝が認められ、板材の壁立ちがあったものと推測される。床面四隅にはそれぞれ柱穴を検出し、その配置から周溝と密接に関わる構造であると考えられる。埋土より陶磁器片が4点出土した。1点は劃花文を有する青磁碗片、1点は常滑産陶器鉢片、1点は渥美産陶器壺片、1点は渥美産陶器甕片であった。建物の特徴および出土遺物から12世紀後半頃の建物であると推測される。建物の機能・性格は不明であるが、居館内部域に設けられた倉庫あるいは工房の可能性が考えられる。

堅穴建物2

調査区中央、堀1で囲まれた居館内部域に位置する。遺構東半は調査直前の擾乱3によって失われていた。埋土より北宋錢が1点出土した。

堅穴建物3 SI454

調査区中央、堀1で囲まれた居館内部域に位置する。埋土より水沼産陶器片が1点出土した。出土遺物および遺構の切り合いから中世前半の建物であると考えられる。

堀1（第24～26図、写真図版8～13）

調査区中央から西側に位置する総延長約180mの大規模な堀である。今回調査した南北両端を結ぶと、堀の内々の距離が110mで、およそ1町（109.09m）の長さに相当する。調査区中央では中世前半遺構面であるⅢb層上面、調査区西側ではⅢb層上面からIX層上面にかけて検出された。略方形を呈する平面区画を創出しており、両端部のやや開いた「コ」の字形の平面形態である。それぞれ東西にある端部はいずれも調査範囲外へ連続するとみられる。ただし、東側の端部は低地部分に接しており、東側壁の立ち上がりは不明瞭であった。また、西側端部は現代の宅地造成による土壤の入れ替えによってほぼ底面まで擾乱されており、残存していない。断面形態は上幅に対して底面幅の狭くなる逆台形である。古代の堅穴住居を各所で切っており、調査区西側においては古代の遺構だけではなく、绳文時代の遺構も切って構築されている。本来地形的に高い場所であった西辺は、高館火山灰層がみられるX層をも切って構築されている。埋土は基本的に黒褐色や暗褐色シルトの自然堆積であり、特に最下層両端は斜面堆積の様相である。ただし、堀西半では下層に一定の土量が堆積した後、中層で土

塙の構築土が上から流入している様子が観察できる。上層もやはり自然堆積であり、埋土最上層では近世の柱穴が検出できることから近世には完全埋没していたものと考えられる。埋土中層にみられる土塙構築土は、一息に流入している様子が看取でき、人為が介在している可能性が考えられる。塙が機能を停止して、一定期間を経て埋没する途中に土塙構築土の流入があったと考えられ、中世後半のいずれかの段階で土塙を破壊したものと想定される。埋土より陶磁器類が出土しており、いずれも12世紀のものである。磁器は白磁や青磁、陶器は渥美産、常滑産のほか水沼産陶器片などの国産陶器が出土している。

[塙 1に架かる橋]

南東および南西にはそれぞれコーナーを有するが、南西コーナーは北西コーナーより曲がりが緩やかである。両コーナーは出入り口としての機能を持っているようである。南西コーナーには、地山掘り残しによる土橋が設けられており、一方南東コーナー付近では橋脚に関わるとみられる打ち込みの木柱が底面で検出された。木柱は打ち込み部先端が工具によって削り加工され、尖っている。

土橋の平面は直線の外形ではなく、中央部が幅狭く、緩やかな弧を描き、出入り口両端部が開くような鼓形である。ちなみに、平泉町にある国指定史跡柳之御所遺跡でも近年の発掘調査で塙に架かる土橋が検出されており、やはり同様に両端が開く平面形態であることが判明している。地山を削り出して築かれている構造上、土橋は当初の設計段階からこの位置に定められていたことが明白であり、なおかつ、その位置は塙の改修を経た後も変わることなく位置を留めている。そして最低でも一度は拡幅の痕跡が認められる。拡幅は当初削り出された側面に土を貼り付けておこなわれおり、塙西側壁と連続して土の貼り付けがなされていることから塙の改修と同時に拡幅が施工されたものと判断される。また、土留めのためか側面や底面裾部分には大小の杭の痕跡が多く検出された。しがらみ構造ではなく、土留め用の板材を固定するための杭であることが想定される。土橋拡幅部側面の維持のため重厚な造作がおこなわれていることがわかる。

[塙の改修]

東辺では認められなかつたが、西辺から南辺にかけて断面での埋土の観察から、少なくとも一度は塙の改修がなされていたことが判明した。塙の改修点は、大きく捉えて2点である。一つ目は塙の深さをより深くし、上幅も拡幅している点、二つ目は塙の中軸線をより内側方向へ変更している点である。翻って、塙の線形や土橋の位置については改修によって変更されていない。さらに、部分的に残存する塙の掘方からみて、おそらく断面形態も相似形であり、大きな変更はないものと考えられる。

[底面の小規模な溝]

塙底面には、小規模な溝が1条検出された。この溝埋土には埋め戻されたような痕跡が認められ、滲水していた様子も窺える。溝は改修後の底面外側基底部で認められる。塙の改修前に掘られた溝であれば、改修前の塙中軸線上にあったものであると想定され、塙も箱築研形の断面形を採用していた可能性がある。しかし、その場合、西辺と南辺に限らず、東辺にも連続しないことが不自然であり、その可能性は低いと考えられる。また、塙の改修後に掘削された溝であれば、底面基底部の側溝としての役割を果たすものであると想定できる。しかし、改修後の溝であれば、基底部片側に寄せる意味が見出せない。そこで、この溝が改修中に掘られたものではないかと考えた。調査中、この溝があるおかげで晴天時には塙底面がぬかるむことなく発掘作業ができ、非常に助けられた。当時も地下水位が現在と同じとは限らないが、塙の掘削に際して有効な水抜き溝として機能していたのではないかと考えた。特に、土塙を構築するためには塙底面の掘削土を、大人の背丈よりも上方の塙の上端へ上げる必要があり、作業床の反対側に溝が切られていると効率的に作業できると考えた。改修時の掘削作

業エリアを避けるように片側に寄っているのも好都合である。そして、作業が終われば埋め戻して、あるいは作業途中でも埋め戻して暗渠として機能していたかもしれない。

[土壘の新設]

西辺から南辺にかけて断面での埋土の観察から土壘構築土が含まれていることが判明した。土壘は堀1の内側辺にのみ築かれていたようであり、範囲は西辺から南辺西寄り部分が推定される。これは埋土に流入した土壘構築土の分布から言及でき、堀1の大規模な改修後に堆積したものである。この土壘構築土は、大小のブロック土で構成されているが、土質の割合は黄褐色シルトおよそ8に対して黒褐色や暗褐色シルトおよそ2の割である。土壘構築に際しては、堀1の掘削土を用いていると推測されるが、より下位の掘削土を多く利用していると思われる。これは、土壘構築と堀1の改修が同時におこなわれたことが推定される。初期段階での掘削土を利用したなら、上部に堆積するⅢ～Ⅶ層が多く混入するはずである。しかし、黄褐色シルトを主体とする構築土のあり方は、すでに上部堆積層が多く残存していない状態で、下部の地山黄褐色シルトが掘削土の主体となる改修時に生じた掘削土を利用したと解釈できる。もう一つは、下部の黄褐色シルトが頑強であると判断し、意図的に選択して用いた可能性が考えられる。この点は、堀の外側壁表面に同様の黄褐色シルトを貼り付けて補修していることからも想像できる。

[堀の変革]

以上のように、この堀は西半において変革が認められる。堀の改修痕跡が認められる南側から西側の範囲では、堀内部埋土に土壘の構築土が認められ、底面には細い溝が検出され、さらに、土橋の拡幅痕跡が明らかになった。これらは、それぞれ有機的に結びついた土木工事であったと判断でき、堀を改修してもその形状や外観を損なわないことを重視している点が注目される。堀外側に位置する側壁は掘削土を貼り付け、なおかつ、その貼り付けは黄褐色土で統一されている。これは堀の側壁の見映えと、改修によって生じた段差など歪になった側壁形状を修正する狙いがあったことが想像される。次に、堀の深さをより深くしているのは、深くして防御性を高める狙いが生じたというのも一考の余地はある。しかし、底面レベルを数10cm下げるだけで防御性が即高まるのか疑問がある。もし、底面レベルを下げる目的であれば、中軸線を内側へ変更する必要はなく、初期の底面を真下へ掘り下げれば、十分深さを得られるはずである。このことは土壘の構築土を得るための掘削であっても同様のことと言える。これらを考慮すると、堀の拡幅・深長、土壘の構築が主たる目的ではないと考えられ、堀の中軸線を内側へ寄せることの方がより重要な目的であったと想定される。

堀2（第24・28図、写真図版7）SD301・SD402

調査区西側に位置し、堀1に平行するように堀1外側を走るが、南西部の曲がりは緩やかでありつつもその先是やや直線的に延び、堀1の線形とは同調しない。南半はⅢa層上面で検出されたが、北半は削平により上部が失われており、IX層での検出であった。北側端部は堀1同様、大規模な攪乱により失われており、どこまで延びているのか調査では不明であった。一方、南東方向に延びた先是、調査範囲境界で立ち上がるこことを確認した。立ち上がり角度は堀の側面と同程度の傾斜である。この箇所で突然途切れるのか、地山削り出しの土橋になるのか、その答えは調査範囲外にあるため現段階では不明である。しかし、堀や溝としての機能を考えた場合、途切れる際は徐々に解消するのが常であり、急な途切れ方はしないことが多い。これを考慮するならば、土橋である可能性も十分考えられる。西辺は、高位面から低湿地に向かう地形の変化点に位置しており、旧地形を反映した位置取りと方向性を有している。断面は整った逆台形を呈し、緩やかに曲がるコーナー部分の堀底面には明瞭な段差が認められるが、どのような経緯で生じた段差なのか不明である。出土遺物の大半は、縄文土器

や土師器・須恵器など異時代の混入であるが、埋土より常滑産陶器片が4点出土した。検出面や遺構の切り合い、出土遺物から判断して12世紀の堀であると推定され、堀1と併存し、外堀としての機能を有していた可能性が高い。

井戸1(第29図、写真図版5) SE01

調査区東端部、堀1の外部域に位置する。溝1と接続する井戸である。Ⅲa層上面で黒褐色の円形プランを検出した。県教委試掘トレンチによって中央東西方向の遺構上部を切られている。中世後半とした掘立柱建物9と平面的な重複があり、井戸埋没後の建物であると考えられる。平面形態は上面では円形であるが、下方に下がるに従って略方形へと変化する。形態的特徴を加味すると素掘りではなく何らかの井戸枠が存在した可能性がある。井戸内部の埋土は、黒褐色シルトに小礫がわずかに混入しており、常滑産陶器片や火打金、鐵錫片などの鉄製品が出土した。時期は出土遺物や溝1との関係から12世紀後半頃であると考えられる。

井戸2(第30図、写真図版16) SE201

調査区東側、堀1の外部域に位置する。県教委試掘トレンチによって遺構南半が切られている。Ⅲa層上面で褐色の半円形プランを検出した。出土遺物は古代の土器片等であったが、検出層位からみて中世前半の井戸である可能性が考えられる。

井戸3(第30図、写真図版16) SE401

調査区中央、堀1の内部域に位置する。堀1南辺寄り、おおむね堀1南辺を二等分した箇所に該当する。Ⅲa層上面で黒褐色の円形プランを確認した。平面形態は上面では円形であるが、下方に下がるに従って略方形へと変化する。形態的特徴を加味すると素掘りではなく何らかの井戸枠が存在した可能性がある。井戸内部の埋土は、上層に地山ブロックを多量に含むシルトであり、完全埋没前に埋め戻された可能性が考えられる。時期を特定する遺物は出土しなかったが、遺構の位置や検出層位からみて中世前半に掘削・機能した井戸であると思われる。

道路1(第28図、写真図版6) SD204・206

調査区中央や東寄り、堀1の東に位置する。Ⅲb層上面で検出したが、それより上層からの掘り込みの可能性が考えられる。溝2と切り合いが認められるが、切り合い関係は不明瞭であった。ただし、これらが錯綜している箇所では、溝2を掘削しながら平面的に2条の道路側溝の検出を試みており、検出されなかつたため溝2が切っているものと判断した。平行する2条の小規模な側溝で構成されるが、路面の構築土等は確認できなかった。時期を特定するような遺物は出土しなかった。配置を考慮すると、堀1へ延びており、橋の敷設された部分に向いている。このことから堀1と機能的に結びついている道路であると想定され、12世紀の遺構である可能性が高い。

区画溝1(第31図、写真図版17) SD02・502

調査区東側、堀1の外部域に位置する。Ⅲa層上面で検出された。古代の堅穴住居を切っており、近世の掘立柱建物が溝埋土上面より切り込んでいる。調査区を横断するように延びているが、北端では低湿地まで延び、そこで解消する。一方、南端部は調査区外へ連続するものと思われる。座標北から約20° 東に振った南北方向の直線的な溝である。断面は逆台形であるが、底面からの立ち上がりは緩やかである。埋土は上層が暗褐色シルトを主体であり、下層は褐色シルトの自然堆積層である。南端部の埋土最上層より青磁碗片、北側の埋土より常滑産陶器片が出土した。出土遺物や遺構の切り合から判断して、中世前半の区画溝であると考えられる。同一の軸方向である区画溝2と密接な関係がある可能性が考えられる。

区画溝2（第32図、写真図版17）SD215

調査区中央南東寄りに位置する。南北方向からほぼ直角に東西方向に曲がり、「L」字形を呈する。南北方向は概ね直線的で、座標北から約20° 東に振っている。この溝は北へ延びた先で堀1の南辺に当たり、途切れている。堀1との切り合いは認められず、堀1の北側で連続する溝が確認されなかつた。このことからこの溝と堀1との関係は併存か、それ以降の溝であると判断され、堀1以降だとしても、堀1埋没以前に開削されたものと想定される。一方、東へ延びた先は徐々に深さを減じ、調査区南辺手前で自然に解消する。断面形は逆台形を呈し、埋土は上下の黄褐色シルトが中層の褐色シルトを挟み、自然に流入堆積している。埋土から古代の土器片が多く出土したが、埋土下層より1点常滑産甕片が出土した。遺構の切り合い、出土遺物から判断して中世前半頃の溝であると考えられる。また、溝の線形は屈曲点から東を指向し、区画溝1に向けて延びている可能性も考えられ、区画溝1と密接な関係であれば方形の区画が創出されていた可能性がある。

溝1（第29図、写真図版4・5）SD01

調査区東端部、井戸1に接続する溝である。県教委の試掘トレーンチで一部切られており、1基の土坑（SK12）を切っている。平面的な位置関係から堅穴建物5とも切り合っている可能性が高いが、遺構同士の接点は試掘トレーンチによって切られており、決定的な証拠を欠いている。中世後半とした掘立柱建物9は溝埋土最上層を切って柱穴が切り込まれており、この建物より古い遺構であることは明らかである。また、北東端部は溝の完全埋没後に島1の歓間が切り込まれている。検出面はⅢa層上面であるが、埋土最上層のシルトと検出面の褐色シルトの区別が難しく当初平面的な検出に苦労した。しかし、これを切る試掘トレーンチの断面から溝の存在が判明し、炭化物等の微細な不純物の混入から切り込み面と平面での検出が可能となった。北西から南東方向に弧を描くように走り、南東端で井戸1と接続する。井戸1との切り合いは認められず、最終的に両者が併存した可能性が高い。北西端部は低地部分へと延び、低地で解消しているようである。溝の底面標高も北西に向かうくなるため井戸1より溢れた水がこの溝を伝わり、北側の低地へ流れ出るような仕組みになっているものと理解される。断面形は楕形を呈し、溝北側部分の底面にはおよそ拳大の石が列状に2列検出された。石列は溝の両下端に沿って並んでいる。本来地山に小石すら含まれない地点であること、溝両下端部をきれいに縁取っていることなどの点から人為的な石列であることは間違いないと考えられる。溝埋土は上位に暗オリーブ褐色から黄褐色のシルトが堆積しており、下位には暗褐色シルトの堆積が認められる。最下層には部分的に炭化物層が顕著である。溝の埋土より多くの遺物が出土した。遺物の中にはかわらけ、白磁碗、鉄製品がある。特に溝底面の石列のある範囲では、厚さ約5cmの炭化物層が広がっており、これを除去すると、まとまった数の小札と白磁碗と一緒に出土した。底面の石列も炭化物層によって覆われている。出土した小札、白磁碗には意図的な損壊が認められることから、この場で何らかの祭祀行為や儀礼行為がなされたものと考えられる。しかし、埋土上位層にも鉄製品の出土が認められることから、埋没する過程で周辺から投棄あるいは流入した鉄製品もあったと考えられる。出土遺物はいずれも12世紀の特徴を示しており、特に鉄製品は種類も豊富である。このうち12世紀前半の白磁碗1点が含まれるが、12世紀後半頃の白磁碗も共伴しているため、12世紀後半頃に祭祀がおこなわれた遺構である可能性が高い。

溝2（第33図、写真図版6）SD201

調査区中央から東側に位置する。古代の遺構を切りながら南北方向に長く延び、調査区途中で緩やかに曲がり、方向を東向きに変える。この曲がり部分では道路1を切っている。溝の北端は低湿地に延びた後解消し、南東端は調査区内で自然消滅する。溝の曲がり角までの直線部分は堀1とほぼ並走

する。一定の深さを維持している北半の直線部分では、底面が平坦な断面逆台形を呈する。埋土には古代の遺構を切っているため、古代の土器が多く含まれているが、北端部埋土下層より白磁壺片が出土した。遺構の切り合い関係や出土遺物から考えて、中世前半の遺構であると推測されるが、遺構の機能および性格は不明である。

(2) 中世前半の遺物

かわらけ（第199図、写真図版188）

A 1～3 の3点のかわらけ片が出土している。いずれも、いわゆる京都系土師器皿と呼ばれる手づくりかわらけである。

A 1は、溝1の埋土中位より出土した。口縁部には2段の強いヨコナデが認められ、外面に明瞭な稜を形成している。外面の2段ナデ境界には、より強い当たりによって沈線状の筋が一条巡っている。内面も丁寧なナデにより滑らかであるが、外面下半は成形後の微細な調整はおこなわれていないため器表面の荒れや凹凸が残っている。形態は浅い皿形を呈し、口縁部は外傾する。胎土は非常に精良で細かな砂粒すら認められない。色調はにぶい黄橙色から乳白色であるが、内面は二次的な被熱のためか赤化している部分が認められる。この被熱と関連すると思われるが、明瞭な油煙痕があり、灯明皿として用いられた履歴を有する。油煙痕は、口縁部外面に垂下した黒化部分が一箇所認められる。約6分の1の残存であると推測される。形態的特徴から12世紀後半の年代が与えられる。A 2は調査区南側のトレンチのIIb層より出土した。口縁部は2段の強いヨコナデが認められ、外面にはそれぞれ明瞭な稜を形成している。内面は丁寧なヨコナデで滑らかであるが、外面下半はヨコナデが施されておらず、器表面に荒れや凹凸が認められる。形態は浅い皿形を呈し、口縁部は面取りがなされ、端部は直立気味である。胎土は非常に精良でほとんど砂粒が認められない。色調は全体的に灰白色であり、白い色調に仕上がるこことを意識しているものとみられる。約8分の1の残存であると推測される。形態的特徴から12世紀後半の年代が与えられる。A 3はSI205埋土出土であるが、遺構は古代の堅穴住居であるため後世の混入遺物であると考えられる。口縁部の小破片であるが、浅い皿状を呈するものとみられる。口縁端部は強いヨコナデが認められるが、体部下半が欠損しているため下段も同様のヨコナデかどうかは判断できない。色調は黄橙色であり、胎土も精良であるが、その他2点のかわらけ片よりもやや硬質である。形態的特徴から12世紀の初産であると考えられる。

3点のかわらけは、12世紀を代表する遺物である。三陸沿岸地域では出土数が少なく、現段階ではこれら出土かわらけが、三陸沿岸において最北の京都系土師器皿ということになる。12世紀、平泉の拠点では、かわらけの大量発見がおこなわれているが、今回の調査では出土量が少なく、かわらけの使用方法や遺跡の性格に何らかの違いがある可能性が高い。

磁器（第199図、写真図版188・189）

中世前半の出土磁器類は、白磁、白磁、青磁に大別でき、白磁の器種は碗・壺類から成る。

E 5は青白磁皿の口縁部片である。堀1（SD207C区）の埋土下層より出土した。2mm以下の非常に薄い器壁で、極端に口縁端部が外反する形態である。E 6は景德鎮産青白磁碗の口縁部片である。II B10 d～f検出面で出土した。口縁部は丸く收められ、体部内面には2条の平行する細くシャープな沈線が認められる。花弁状の口縁部であった可能性が考えられる。E 7は白磁碗の体部片である。4区北側の表土～検出面で出土した。内面見込み部分に1条の深い沈線が巡っている。E 8は白磁碗体部下半片である。堀1（SD207）埋土より出土した。比較的直線的に外傾する形態であると推測される。外面は下半に無釉部分があり、無釉部分には高台部と体部との境がわずかに認められる。内面見

込み部分には深い沈線あるいは段が認められ、この箇所は無軸に見える。のことから見込み部分は釉薬の掻き取り痕が存在する可能性が考えられる。12世紀の中でも後出するものの可能性が考えられる。E9は白磁碗底部片である。溝1埋土最下層より小札とともに出土した。内面見込み部分には微かに沈線が1条みられる。無軸部分および破断面は煤が付着しており黒化している。高台部分は欠損しており、突出部を狙って意図的に打ち欠かれた可能性が考えられる。E10は白磁碗である。溝1埋土最下層より小札とともに出土した。外面の体部下半は無軸である。高台は外縁部が直立、内縁部が膨らみを持ちながら斜めに削り出されている。12世紀の中でもやや古相の特徴を有している。E11は白磁碗の口縁部から体部下半片である。口縁部は外方へ極端に屈曲し、屈曲部は外面とともに明瞭な稜が認められる。体部はわずかな丸みを持つのみで、比較的直線的に立ち上がる。外面は口縁部直下から体部下端に至るまで回転ヘラケズギが施されている。内面見込み部分には無軸範囲が認められ、軸の掻き取りが施されたものと理解される。見込み無軸範囲には段が削り出されている。12世紀の中でも後出するものの可能性が考えられる。E12は白磁四耳壺肩部片である。堀1 (SD207) 埋土上層より出土した。内面は水平方向のロクロ目が明瞭である。外面には立体的な造形の突出部が取り付き、四耳壺の耳部分であると考えられる。耳の取り付け部は左斜め下がりに曲線を描くように取り付けられており、耳の橋状部には少なくとも3条の凹みが認められる。この耳基部の釉溜りによって天地を判断した。破片は内外面ともに施釉されている。E13は白磁水注の肩部片であると思われる。ⅢB2aの表土より出土した。破片上端部には、内外面ともに大きく屈曲するとみられる箇所があり、この箇所は肩部から注口部側面へと移行する屈曲部であると推測される。これは変化する曲線がロクロ目に直交する方向であるため注口部へ続くと想定するのが妥当であると判断した。さらに、上端部には釉溜りが微かに確認でき、肩部から頸部への変化点に溜まった釉であり、ここに該当するものと考えられる。破片は内外面ともに施釉されている。E14は白磁壺類の体部片である。SD201埋土より出土した。破片内面には明瞭なロクロ目を残している。内外面ともに施釉されており、端部に無軸部分が認められる。のことから体部でも上半片であると推測される。四耳壺か水注であると思われるが、体部のみの破片であり、いずれか不明である。E15は白磁壺類の体部片である。SD601の流末埋土より出土した。破片内面には明瞭なロクロ目を残しているが、内面には部分的に釉垂れがあるものの大半に釉が認められない。四耳壺か水注であると思われるが、体部のみの破片であり、いずれか不明である。E16は青磁盤の口縁部片であると考えられる。堀1 (SD402D区西) 土橋および南斜面貼付土より出土した。口縁部は緩やかに外反する形態であることから碗ではなく盤の可能性を想定した（新井崇之氏のご教示による）。内面には不明瞭ながら半肉彫りの劃花文が認められる。胎土は緻密で青灰色であり、釉は淡い緑色に発色した半透明釉である。特徴から龍泉窯産であると推測される。E17は青磁碗の口縁部小片である。堀1 (SD402F区) 埋土上層より出土した。小片であり、全体形状は不明であるが、口縁端部は丸く收められている。口縁部外面にはわずかに2条の櫛目文が確認できる。口縁部直下の内面には横方向の藤状の文様、さらに下位では縦方向の櫛目文が微かに確認できる。胎土は淡い灰色を呈し、ガラス質の透明釉が施されている。特徴から同安窯系の製品である可能性が考えられる。E18は青磁碗の口縁部から体部片である。堅穴建物 (SI208) 埋土中位より出土した。内面には劃花文が認められる。胎土は灰白色で、釉は淡い青白色に発色した半透明釉である。特徴から龍泉窯産であると推測される。E19は青磁碗の体部片である。区画溝1 (SD502) 埋土最上層より出土した。内面には劃花文が確認できる。文様の意匠は蓮の花弁から下方に延びる茎の類であると想定される。胎土は淡い灰色を呈し、釉はオリーブ色に発色した半透明釉である。特徴から龍泉窯産であると推測される。E20は青磁碗の体部片である。II B10e検出面より出土した。内面には劃花文が認められる。

文様の意匠は草花であり、弧線の先が渦巻き状となる。胎土は灰色で、釉は青緑色に発色した半透明釉である。特徴から龍泉窯産であると推測される。E21は青白磁碗の体部下半片である。西側低地帯 IIY4dのⅢ層より出土した。内面には太めの弧線と細かな櫛目による割花文が認められる。灰白の胎土に半透明の釉が掛けられており、青白く発色している。E22は青磁碗の体部下半片である。II B10d ~f検出面で出土した。内面見込み部分と思われる箇所には段が認められる。胎土は灰色を呈し、ガラス質の透明釉が施されている。特徴から同安窯系の製品である可能性が考えられる。E23は青磁の底部片である。5区ⅢB擾乱より出土した。内面見込み部分には工具による調整痕跡が明瞭な段を持つ認められる。高台部は面を持ちながら丁寧に削り出されており、特徴的である。高台部外縁は直立し、内縁は斜めで、いずれも直線的に切り出されている。胎土は濃い灰色を呈し、ガラス質の釉が施されている。特徴から龍泉窯あたりの製品で、内面の調整痕跡からこの箇所に指の届かない器種である。小口径鶴首を有する瓶類の可能性が考えられる（新井崇之氏のご教示による）。

以上のように、12世紀に帰属すると考えられる中国産の磁器は青白磁皿2点、白磁碗6点、白磁壺類4点、青磁碗6点、青磁特殊器種1点である。数少ないが、青白磁皿・白磁四耳壺・青磁特殊器種は優品であり、この遺跡の性格を物語る遺物であると考えられる。出土した磁器類の時代について概観すると、白磁碗の中にE10のように12世紀前半のもの（太宰府分類：白磁碗Ⅱ類）が含まれているが、その他は12世紀後半のもので占められている。中国産磁器が、この遺跡に持ち込まれた時期は12世紀を主体とするとみることができる。

国産陶器（第195・199～203図、写真図版188～192）

出土した中世前半の陶器は、すべて国産陶器である。これらは産地によって、渥美産陶器、常滑産陶器、東北諸窯産（宮城県水沼窯など）陶器に区分されるが、すべてを完全に産地によって区分することは困難であり、様々な属性から産地についてある程度言及できる遺物については記すが、渥美と常滑の区別できないものは東海産とした。出土した国産陶器の器種構成は鉢、壺、甕である。

F5～11は常滑産陶器鉢である。鉢は体部片であっても明瞭なロクロ目と器厚、胎土、調整、内面の使用痕など諸属性から壺・甕類片と明確に区別できる。F5～7は体部片である。F5は内面に濃緑色の自然釉が認められ、窯内で重ね焼きをおこなわれた際に最上部に配置されたものとみられる。F7は下半に回転ヘラケズリが認められ、体部下半の破片であると判断できる。F8～10は体部下半から底部にかけての破片である。F9・10には接点こそみられないが、F7と同一個体の可能性も考えられる。F11は鉢の口縁部片であり、玉縁傾向の形態を呈する。13世紀初頭～前半の常滑産鉢である可能性が考えられる。F12は渥美産鉢の口縁部片である。口縁端部は丸く收められている。類例に乏しいが、渥美窯最終末期の製品の可能性が考えられる。F13～27は国産陶器の壺類である。いずれも破片であるため全体の形状を推し量るのは困難であるが、甕片と異なり小形、薄手、比較的精良な胎土と丁寧な調整、美的観点を重視した釉調などの特徴が認められる。なお、甕に分類したものの中にも壺も含まれているかもしれないが、逆もあり得ることを付け加えておく。F13～17は、いずれも渥美産陶器壺の破片である。それぞれ堀1の近い地点から出土しており、破片の特徴も共通することから、同一個体の可能性が考えられる。F13は外面にロクロ目があり、体部下半に該当するものとみられる。無釉の内面は須恵器のような明るい青灰色の色調を呈しており、外面は灰色味のあるオリーブ色の自然釉が認められる。胎土は精良であるが、細かな白色砂粒が顕著にみられる。器表面は丁寧な横方向の調整によって滑らかである。F14は、器壁の縦方向に緩やかな曲線がみられる。外面には全面に自然釉がみられ、上部には星状の降灰がみられる。以上のことから肩部付近の破片であると考えられる。F15は外面全面に自然釉がみられるが、器壁の縦方向の曲線は緩やかであるため体部中位から

上位に該当すると考えられる。F16は器壁の縦方向に緩やかな曲線がみられ、肩部付近の破片であると考えられる。部分的に自然軸が剥げている。F17は頸部片であるとみられる。内外面に自然軸が認められ、器壁は上部ほど薄くなるようである。F18～20は常滑産陶器壺であると考えられる。いずれも淡い赤褐色の素地で固く焼き締められている。各破片の線刻が意図的なものであれば三筋文壺あるいは二筋文壺であると推測される。F18は肩部片であると考えられる。器壁は縦方向に緩やかに彎曲する。上半には星状の降灰が認められる。調整によるものか意図的に施したものか判断できないが、肩部と体部の変化点付近外において横方向に線刻らしい細い刻線が1条みられる。F19は体部片である。自然軸は掛かっておらず、下半部に向け器厚が大きくなるため体部下半の破片であると推測される。横方向に細い線刻が1条施されている。線刻は途中で徐々に細くなり、消えており、一息に巡らされたことがわかる。F20は体部片である。自然軸は掛かっておらず、火回りのためか他の破片よりもやや硬質な焼き上がりに見える。調整によるものか意図的に施したものか判断できないが、外面に横方向に線刻らしい細い刻線が1条みられる。F21は渥美産陶器の大形壺の破片であると推測される。破片は部分的に白色の降灰が顕著に認められるため、肩部付近に該当するものと考えられる。素地は須恵器に近い色調であるが、内面調整が須恵器よりも粗い。破片下部外面には横方向にしっかりととした太い線刻が1条施されている。また、破断面に掛かる位置に直交するように縦方向の線刻が微かに確認できる。これら線刻は記号の可能性もあるが、力加減が均一でしっかりとしており、フリー・ハンドではないと思われる。これに続く破片は出土していないが、この壺は袈裟摺文が施された優品である可能性が考えられる。仮にそうであれば、平泉金鶴山経塚資料にその類例を求めることができる。F22・23は常滑産陶器の三筋文壺体部片である。胎土は精良であり、焼成も良好である。直線的な体部形態であると考えられる。上部には軸重れした濃緑色の自然軸がみられる。破片上下にはそれぞれ横方向に水平の線刻が巡っている。彎曲すると思われる肩部片の出土が認められないが、通常肩部にも水平線刻があるはずであり、出土した破片は体部に施された中段の線刻と下段の線刻とみて相違ない。のことからこの壺は二筋文ではなく三筋文であると考えられる。F23にも破断面に掛かる位置において水平の線刻が認められ、同一個体であることは間違いない。破片の器厚からみて下段の線刻であると考えられる。F24は渥美産陶器壺の体部片であると考えられる。内外面ともに丁寧な調整で器表面が整えられている点、比較的薄手であることから壺に分類した。調整によるものか意図的に施したものか判断できないが、外面に斜め方向に線刻らしい細い刻線が1条みられる。F25～27はいずれも渥美産壺の体部片であるとみられる。比較的厚手で曲面もないため大形製品であると考えられる。いずれも非常に精良な胎土、丁寧で滑らかな仕上がりの器面調整、薄く均質な自然軸など諸属性が共通しており、同一個体であると考えられる。F25の外面には微かな線刻状の筋が認められる。器面調整が非常に丁寧であるため、調整時不用意に付いたものではないと思われる。刻画文が描かれた壺である可能性も考えられる。F28は水沼産陶器壺の頸部から肩部片である。肩部外面には降灰した黄褐色の付着物が固着している。頸部内面は光沢のある黒色を呈し、肩部に下降するに従って赤化する。破断面の色調は外面側が青灰色、内面側が赤褐色のグラデーションがみられる。胎土や色調が、水沼産の特徴を色濃く表出している。F29は水沼産陶器壺あるいは壺の体部下端から底部片である。外面は光沢のある黒色、内面は光沢の無い黒灰色を呈する。体部下半外面には長格子目の押印が多数施されている。押印は成形一段目の接合面を意識して施されたものとみられる。押印原体の向きは揃っておらず、重複する部分も認められる。F30～52は渥美産陶器壺であると推測されるものである。口縁部や底部片は出土しておらず、すべて体部片である。F30は小破片であるが、外面に長格子目の押印が認められる。暗い青灰色を呈し、無軸である。外面の一部、内面の一部、破面の一面に明

瞭な均一な磨痕が認められる。これら3箇所はいずれも平滑になっており、破片となった後、磨る道具として転用されたと考えられる。想定される道具の種類として砥石が最有力である。F31は無文の小破片である。青灰色を呈し、無釉である。内面の一部に擦痕が認められ、この擦痕は破面の端部に及ぶ。破片となった後、磨る道具として転用されたものと考えられ、F30同様に砥石として再利用されたと想定される。F32は青灰色を呈し、無釉の小破片である。内面には降灰が認められるため、体部下半片であると推測される。外面には平行あるいは長格子目の押印が認められる。内面には板状工具による調整が施されている。F33~37はすべて濃い青灰色の素地で、部位によって外面の様子が異なるものの同一個体であると考えられる。F33・34は縱方向の彎曲から体部上半の破片であるとみられる。外面には濃緑色の自然釉が掛かり、長格子目の押印が認められる。F35~37は外面に押印の認められない体部下半片である。F35・36は外面全面に釉がみられるが、F37はわずかに認められるのみである。F38・39は大粒の砂粒を含まない非常に精良な胎土であり、その他の塊片とは大きく異なる。内面の器表面は褐色であるが、破断面は灰白色を呈する。外面には緑色の自然釉が認められ、F38には平行あるいは長格子目の押印が認められる。両者は胎土や色調から同一個体であるとみられる。F40~43はすべて青灰色の素地で、部位によって外面の様子が異なるものの同一個体であると考えられる。胎土はおおむね精良であるが、白色の砂粒を含む。F40は外面に灰白色~緑色の自然釉が認められる。平行あるいは長格子目の押印が規則的に上下2段並ぶ。F41・42は外面に灰白色~緑色の自然釉が厚く認められ、平行あるいは長格子目の押印はほとんど隠れている。F43は無釉の破片であり、体部下半の部位が想定される。F44・45は灰色の色調、精良な胎土である。内面に星状の降灰を受けている。胎土および色調から同一個体であると考えられる。F44は粘土の継ぎ目に対応する外面に格子目の押印が連続して施されている。F46は長格子目の押印が認められる小破片である。F47~50は無釉、押印無しの小破片である。いずれも胎土は精良で、灰色や褐色を呈する。F51は外面に自然釉が掛かる小破片である。F52~83は常滑産陶器甕であると推測されるものである。破片の大半は体部片であり、全体の形態がわかる個体は無い。F52は体部下端から底部にかけての破片である。平坦な底部から外反するように体部へと立ち上がる。胎土は比較的精良で砂粒が少ない。灰黄色の色調でやや軟質な焼き上がりである。F53は体部片である。胎土に白色の砂粒を含み、黄灰色の色調である。外面には格子目の押印が比較的ランダムに認められる。内外器表面に無数の擦痕がみられ、内面は研磨によって著しく摩滅している。砥石に転用された履歴を有するものと考えられる。F54は押印を有する体部片である。胎土は非常に精良で、にぶい褐色を呈する。外面は細かな条線の調整痕跡がみられ、木製の工具の使用が想定される。内面には降灰付着物がみられる。外面の押印は単純な格子目ではなく、方形を基調とする手の込んだ原体であると推測される。F55~57は胎土に中粒の白色砂粒がまんべんなく認められる。色調は赤味のある褐色を呈し、破断面と器表面の色調変化はほぼ認められない。外面には浅い当たりで格子目の押印が施されている。胎土、色調、押印などの特徴が共通しており、同一個体の可能性が考えられる。F58・59は胎土に白色砂粒を少量含み、内面は常滑窯産特有の明るい黄褐色の自然釉がみられる。外面には細かな目の斜格子目の押印がみられる。外面の色調はF58が黒褐色、F59が赤褐色と異なるが、その他の特徴は一致しており、両者は同一個体であると考えられる。F60は体部下半の破片であると考えられる。外面および破断面は赤褐色を呈し、胎土には大粒の白色砂粒を多く含む。内面には降灰が認められる。外面には比較的単純な格子目の押印が連続して施されている。常滑産陶器としたが、特徴は水沼産陶器にも似ており、器表面の光沢ある黒色を帯びていない水沼産陶器の可能性もある。F61は外面に押印の施された小破片である。褐色の色調で、胎土は精良である。押印は長格子目の原体であり、深く刻まれている。薄手で

硬質に焼成されており、渥美産陶器の可能性もある。F62は外面に自然釉が厚く掛かった破片である。内面は明るい黄褐色の自然釉がみられる。灰白色の破断面で胎土は精良である。F63は頸部から肩部にかけての破片である。胎土は微粒の白色砂粒を含むがおおむね精良である。色調は褐灰色を呈する。肩部には著しい降灰が認められる。頸部内面は板状工具によって横方向の器面調整がなされている。F64は外面灰白色、内面赤味のある褐灰色でやや軟質な焼き上がりである。精良な胎土であるが、白色砂粒をわずかに含む。F65は胎土に微粒の白色砂粒を多く含む。色調は内面褐灰色、外面灰黃褐色である。F66は胎土に白色砂粒を含む。色調は内面褐灰色、外面赤味のある褐色である。F67は精良な胎土である。色調は内面褐灰色、外面淡黒褐色である。F68は精良な胎土である、色調は破断面から内面にかけて褐灰色、外面褐色である。F69～71は胎土に白色砂粒を非常に多く含み、外面褐色を呈する破片である。胎土および色調が共通しており、同一個体の可能性が考えられる。F72は褐灰色を呈する小破片である。外面にハケ状の工具痕跡が認められる。F73は外面淡褐色を呈する。胎土は精良だが、灰白色的薄い粘土層が幾重か認められる。内面は灰色であるが、器表面に擦痕がみられ、なおかつ不自然に滑らかである。破片となった後、砥石として転用された可能性が考えられる。F73は74と胎土が共通するが、外面の色調が赤褐色である点が異なる。同一個体の可能性もあるが、断定できない。F75・76は内外面ともに褐灰色の色調である。胎土には灰白色の薄い粘土層が縞状に認められる。外面には器面調整の痕跡を残している。両者は同一個体の可能性が考えられる。F77～81は胎土に大粒の白色砂粒と黄橙色の薄い粘土層が縞状に認められる。内面は褐灰色を呈する。内面調整は工具を用いているが、著しい凹凸がみられる。このような特徴が共通することからこれらは同一個体の可能性が考えられる。F77は彎曲から肩部片とみられ、上面に著しい降灰が認められる。同様にF81は全面に降灰が認められる。F82・83は胎土に白色砂粒と黄橙色あるいは灰白色の薄い粘土層が縞状に認められる。外面は褐色を呈する。

以上のように、中世前半の陶器は渥美・常滑といった東海地方の主要生産地からこの遺跡に持ち込まれた搬入品である。これら陶器の壺には三筋文壺など優品が含まれている点が注目される。また、東海地方以外の水沼産陶器片が出土している。水沼産陶器は平泉の藤原氏が開窯に大きく関与しているとされる。水沼産陶器の出土は県内でも限られており、製品流通を考えるうえで重要である。

金属製品（第204～208図、写真図版193～196）

中世前半の出土鉄製品は、溝1および井戸1など祭祀に関わる遺構より出土したものが主体である。この時代の鉄製品には武器・武具類のほか、工具や日用品も含まれており、非常に多彩である。特に、大鎧の小札14点は県内最多の出土数である。広く国内を見渡しても茨城県仲郷遺跡・神奈川県下馬周辺遺跡・京都府法住寺殿の3遺跡のように大鎧として組まれた状態で一括出土した例を除けば、一遺跡から出土した大鎧用の鉄製小札としては国内最多であろう。

G 1～14は大鎧用の鉄製小札である。G13は札頭側と札尻側の断片に分かれているが、同一個体であると考えられる。その他破片となっている個体同士はわずかに札幅が異なっているため別個体であると判断され、計14個体の小札である。G 7が溝1周辺の検出面出土である以外は、すべて祭祀に関わる溝1の埋土より出土したものである。良好に残存する小札は、札尻（下辺）および片側縁部（左辺）に捻り返しと呼ばれる折り返し部分が確認でき、札頭は緩やかな左右逆「へ」の字形の曲線を描く形態である。捻り返しは平安時代末期の大鎧用鉄製小札に特徴的な手法である。これら外形的特徴は14点とも共通しており、ほぼ同一規格であるとみられ、同一の型を基準に製作されたものと推測される。6個の小円孔が縦方向に1列、7個の小円孔が縦方向に1列並び、計13個の小円孔が穿たれたいわゆる並札と呼ばれるものである。最上部の3個の小円孔は威の穴、上段の左右2個の小円孔は、

毛立の穴、下段の左右8個の小円孔は下緘の穴と呼び慣わされる。緘の穴と毛立の穴の境界は微かに間隔が空けられており、これら的小円孔における機能上の差が表出していると考えられる。横方向の位置は緘の穴のみが、微かに中心寄りに位置する以外はすべて規則的に列を成している。精巧な配置と高い規格性を示している。これら小円孔の径差は認められないのが特徴である。形態的な特徴から大鎧用の鉄製小札の中でも古相であると考えられる。大鎧の小札を対象にした編年（津野2011）に比定すると、伝世資料では栃木県唐沢山神社蔵大鎧、出土資料では平泉町柳之御所遺跡などが類似している。津野の着目した属性は、札頭の形態・捺り返しの有無、穴の径差の有無などであり、これらを総合して考えると今回出土した小札は11世紀から12世紀前半に位置付けられる。溝1で共伴する白磁碗のうち1点は12世紀前半の年代が想定されるため、この年代に比較的合致する。また、岩手県内で出土している釜石市川原遺跡、二戸市仁昌寺II遺跡の小札とも概ね共通する形態である。ただし、川原遺跡出土小札には捺り返しが認められない個体も存在しており、やや後出する可能性も考えられる。今回出土した小札の特徴の一つに大きさが挙げられる。札丈は出土小札および伝世小札の中で最大級である。大鎧の盛行する時期においてもこれほど長大な並札は存在しない。これに合わせる皮札の加工を考慮すると相当重厚な大鎧となった可能性が考えられる。次に、破損している小札に関して言及しておく。G2～4は折れ曲がっており、特にG4はクランク状に折れ曲がっており、過度な力が加えられたと推測される。また、G8は金切り鋏のようなものによって切り込みが入っている。破損状況からみて、意図的に損壊されたものであると考えられ、出土した溝1の祭祀的な性格を物語っている。これら小札が本来大鎧に用いられるものであることは述べた通りである。大鎧は騎馬武者の武装であり、一両を鉄札と皮札を混ぜて組み上げる。概ね胴回りであれば皮3：鉄1あるいは皮2：鉄1の割合で成されると推定されている。組み上げに際しては微調整である矯めや漆による塗り固めなどがなされる。しかし、出土した小札にこのような痕跡は認められないため、組み上げられた経歴を持たない小札であったと推測される。現代風に言うならば、これら出土小札は大鎧のメンテナンスに備え、リペアパーツとして保管されていたストック品の一部を、何らかの理由で意図的に破壊し、祭祀行為に際して遣棄されたと推測される。この間、製作された時期から遣棄された時期までかなり時間が経過していた可能性も考えられ、やや古相の品を12世紀後半に遣棄したものとみられる。G15は鉄鎌である。溝1埋土上層より出土した。鎌身部は、长三角形で鎌身部から頭部にかけては緩やかに窄まる形態である。関部は断面方形の突出が全周して認められる。茎部は、端部が欠損しており、もう少し長いと推定される。茎部の断面は方形である。出土遺構や形態的特徴から12世紀の鉄鎌であると考えられる。G16は馬具の衡である。溝1埋土中位より出土した。角棒の両端を環状に曲げられている。両端部の狀状部分には大小の差がある。小形の環がもう一对の衡と連結し、この連結部分を馬の口に食ませるものと思われる。大形の環は轡の鏡板に連結されるものと考えられる。出土遺構から12世紀のものと考えられる。12世紀の轡は全国的にも出土例が少ないが、奈良市内で源平合戦場（平家の南都焼き討ち）の杏葉轡が出土している。これには今回出土した衡とほぼ同形態・寸の衡が2個連結した状態で確認できる（奈良市教委1989）。G17は溝1より出土した弓削刀子である。直線的な柄部に対し、斜めに刃部が作り出されており、刃部は緩やかに彎曲する。刃部先端は欠損しているが、内彎側に両刃が研ぎ出されているようである。用途は弓の製作に用いられる削り用の工具であるとされている。共伴遺物から12世紀代のものであると考えられる。弓削刀子は福岡県に集中して出土例が確認されているが、全国的にみても出土例の少ない遺物である。これら類例のうち2例は12～13世紀の中世墓の副葬品として出土しており、弓の製作工人が用いる工具であると同時に、祭祀的な意味合いを帯びた製品であることが考えられる。また、同様の形態の刀子が中世の絵画資料にもみられ

る。中世の絵巻物である『職人尽歌合（七十一番職人歌）』の十六番に弓作り職人が描かれており、職人の傍らに置かれた弓削刀子が表現されている。G18は和鉄である。やはり溝1埋土から出土したものである。刃部から握部まで完存している。全体を有機質のものに覆われていたようで、一部有機質の付着物が残存している。毛抜とともに古代や中世において女性の保有する手箱に収められる化粧道具の一つである。G19は毛抜である。溝1埋土上層より出土した。断面は、半月状を呈しており、断面方形の両端を面取りしている。両先端部も合うような加工が施されているようである。和鉄とともに古代や中世において女性の手箱に収められる化粧道具の一つである。有史以来通有の形態であるが、出土遺構から12世紀のものであると考えられる。G20は火打金である。溝1に接続する井戸1の埋土上層より出土した。頂部山形を呈する左右対称の形態で、左右両端部が上方へ跳ね上がるような形態である。下端部は水平でやや厚みを持たせて作り出されている。全体的に鈎で覆われているが、頂部にはX線画像で小円孔が1個認められる。火打金はしばしば墓の副葬品、山岳宗教聖地、経塚などで出土し、祭祀的な意味合いの濃い遺物であることは知られている。出土した井戸1や関連する溝1の性格を物語る遺物である。形態的特徴は平安時代であり、共伴する遺物から12世紀頃の年代が考えられる。G23は溝1出土の不明鉄製品である。断面逆「U」の字形を呈する金具である。片側先端部は細く絞られ、もう片側の先端部はわずかに「八」の字形に広がり、両端部で微かに外反する。円孔が1箇所認められ、目釘孔として棒状の木製品などに錐留め装着・固定された可能性が高い。形態から木製鏗の吊金具の一種である可能性も想定される。G21は溝1出土の短剣である。一見刀子ともみられるが、両刃となっているため剣とした。特殊な工具の可能性もある。G22は溝1出土の刀子である。G17同様柄部と刃部が直線的な関係ではないため、弓削刀子の一種である可能性も考えられる。柄部には木質部分がわずかに残存しており、木製の柄が装着されていたことが推測される。G24は溝1出土の鉤状鉄製品である。側面は鍛打によって整形されている。用途は不明であるが、尖った先端部は大きく曲がっている。自在鉤のような用途が推測される。G25は溝1出土の板状鉄製品である。形態から鎌の可能性も考えたが、刃部が作り出されていない。また、小札と一緒に出土しており、曲線を描く形態からや大きさから大鎌に装着される障子板の可能性も考えられたが、取り付け部が認められないため断定できない。G26は溝1出土の手鎌である。片端部は欠損しているが、残存する側には円孔がある。円孔には目釘が残存する。刃部は研磨によって中央部が痩せ、微かに曲線を描いている。繰り返し使用されたと推測される。形態からは時期を特定できないが、出土遺構から12世紀頃の可能性が高い。G27は溝1出土の不明鉄製品である。細い棒状の製品である。G28は鉄鍋片である。井戸1埋土上層より出土した。口縁部から体部上半部の破片である。内面には内耳把手が取り付けられていたものと考えられるが、把手取り付け部のみの残存で、内耳把手の形状は不明である。口縁部は外傾し、頸部には緩やかな屈曲が認められる。口縁端部はやや厚みがあり、明瞭な端面を持つ。共伴遺物から12世紀のものである可能性が高い。G30は溝1出土の鎌先片である。断面「V」字形に形成されており、片側上部の破片である。G31は溝1出土の紡錘車の円盤部分であると考えられる。G32は調査区中央西側IIAグリッド南端部のIIb層より出土した釘隠である。釘隠は建物の長押などで使われ、文字通り釘頭を隠すように設えた飾り金具である。全体を縁銷で覆われているが、表側は比較的縁銷が剥がれている。天地は不明であるが、横長の菱形に上下端部がわずかに突出するものと推測される。菱形の造形の中心に方形の釘孔が認められ、釘孔の横に1箇所極小の円孔が付属する。表面には植物の文様が陽刻されており、菱形の全体形状と合う四葉座の形態であると判断される。図像はフタバアオイの葉に似ており、左右両面にそれぞれ1枚ずつ配置されている。上下区画の図像は不明であるが、何らかの図像が配されているようである。中心部には釘頭を覆うように釘孔よ

りも一回り大きな円形の凹みがみられ、円形の部位が付けられていた痕跡が残っている。さらに、この円形の凹みを取り囲むように破損部分があり、これらは規模・形状は不明であるものの透かし孔であった可能性がある。釘隠は平安時代後半より出現する金具であるが、遺物そのものの年代は不明である。出土層位は中世前半の段階であると考えられ、中世前半の可能性がある。G34は短刀である。全面を厚い鉄によって覆われている。柄部下半には目釘孔が認められる。遺構外の出土であるが、形態から平安時代末頃のものである可能性が高い。

馬歛（写真図版196）

中世前半の遺構から出土した馬歛である。特に、堀1など大きな遺構には比較的多く含まれている。前後する時代の馬歛が混入した可能性もあるが、12世紀代の馬歛も相当数含まれているものと考えられる。馬匹生産の可能性を示唆する遺存体である。

木柱（第209図、写真図版197）

堀1南西隅付近の堀底面で検出した木柱である。残存する長さは196cmであるが、上端部が折れているため本来の長さはさらに長かったものと推測される。検出時はこの上端部のみ堀底面かわざかに突出しており、大半は地中に埋まっていた。比較的真っ直ぐな材であるが、わざかに曲がりがみられる。材表面には所々細かな横方向の鋭利な複数傷があり、これらは樹皮を剥いた際に付いたものと思われる。すなわち、樹皮が剥がされた状態で用いられた可能性が高い。先端部は加工痕が明瞭で手斧のような工具で尖らせてある。木柱使用時は、柱掘方を掘削せず、杭状に尖った先端部を堀底に打ち込んでいる。堀1に伴う木柱であり、木橋あるいは橋脚を支持する付属の木柱であると考えられる。

（福島）

4 古墳時代～古代の遺構と遺物

古代（7～10世紀）の主要な遺構は、堅穴住居を中心とする集落の居住域を構成する遺構群である。また、これらに付随する各種土坑や溝などを検出し、調査をおこなった。出土遺物は土師器・須恵器を始めとする土器を中心に出土しているが、鉄製品・土製品・石製品も多く認められる。今回の調査では遺構・遺物ともに最も多い時代であるため、ここではこの時代の調査概要を報告し、その後個別の遺構について詳述したい。

この遺跡で該期の集落が形成されるのは、7世紀後半であると考えられる。その後断続的に集落は存続し、概ね10世紀前半には堅穴住居が營まれなくなる。古代集落の成立が7世紀後半で、9世紀代に最盛期を迎える。10世紀には終焉に向かう様相である。古代の堅穴住居はいずれも平面方形を基調とし、カマドを有するものが大半である。これら遺構の密度は非常に高く、多くが切り合いを有する。これは7～10世紀前半までの堅穴住居が変遷した結果が表出していると考えられる。

集落成立期に当たる7世紀後半の堅穴住居はSI444などが該当する。この時期の住居は調査区の東側に多く分布するが、西側にも散見される。いずれも理論上はIIIb層上面の古代遺構面で検出されるはずであるが、困難であったため大半が4層上面での検出をおこなった。

集落最盛期の9世紀代の堅穴住居は、低湿地帯およびその周辺除く調査区全域に分布する。多数の堅穴住居が密集して存在しており、9世紀の約100年間で繰り返し堅穴住居が築かれたものと考えられる。

集落終焉期に当たる10世紀前半は散逸的に堅穴住居が分布するが、おもに調査区中央から西側にかけて分布域がある。

また、プレ古代集落と言うべき古墳時代の遺物が少量出土している。ただし、この時代の遺構は認められない。調査区周辺域に存在する可能性もある。

(1) 壁 穴 住 居

古代住居1（第37図、写真図版18）SI08

調査区東側に位置する。県教委試掘トレンチで一部切られている。北辺にカマドが構築されており、煙道は北方向へ地山を削り抜いて延びる。カマド両袖は微かに残存するが、破壊されている。遺物はわずかに古代の土師器が出土した。9世紀の住居であると考えられる。

古代住居2（第38図、写真図版18）SI09

調査区東側に位置する。わずかに軸方向の異なる古代壁穴住居2（SI10）を切っている。軟弱な地盤であるが、床面は硬化している。カマドは北西辺に付き、煙道は北西側に延びる。煙道は地山を削り抜かれたものである。遺物は埋土や床面より土師器類が出土した。いずれも9世紀代のものである。

古代住居3（第39図、写真図版18）SI10

調査区東側に位置する。わずかに軸方向の異なる古代壁穴住居1（SI10）に南半を切られている。カマドは北辺に付き、煙道は北方向に延びる。カマド両袖は切られている。煙道は削り抜かれたものである。北東隅には小土坑が1基検出された。土師器類が出土し、いずれも9世紀代のものである。

（福島）

古代住居4（第40図、写真図版19）SI11

調査区東側に位置する。平面方形で西辺にカマドが構築されている。カマドは南袖内部の構成縦が良好に残存していた。板状の礫を複数組み合わせて立てた状態であった。遺構を検出中、埋土最上層で須恵器甕の破片がまとめて出土した。出土遺物は9世紀であると考えられる。

（宮内）

古代住居5（第41図、写真図版20）SI12

調査区東側に位置する。SI13と重複する。北辺中央にカマドが付き、煙道は北向きに延びる。煙道は地山削り抜きである。出土遺物は埋土下層を中心に土師器類が出土した。

古代住居6（第39図）SI13

調査区東側に位置する。SI13と重複する。西辺中央にカマドが付き、煙道は北向きに延びる。煙道は地山削り抜きである。出土遺物は埋土下層よりわずかに土師器が出土した。

古代住居7（第42図、写真図版20）SI14

調査区東側に位置する。比較的大形の住居である。北東辺中央にカマドが構築されており、煙道は北東方向に延びる。地山を削り抜いたものかどうかは不明である。床面では他の住居煙道および煙出しがわずかに認められたが、これを有する住居は確認できなかった。多くはないが土師器が埋土より出土している。出土遺物から9世紀前半の住居であると考えられる。

古代住居8（第93図、写真図版62）SI501

区東側に位置する。SI14と重複し、これを切っていたと考えられる。カマドは北東辺に築かれていたと考えられるが、構造物は確認できなかった。ただし、カマド構築土が集中して散乱していた。焼土も弱い被熱であり不明瞭である。煙道は北東向きに延びるが、開削方法は不明である。平安時代の土師器片微量と鉄鏃1点が出土した。詳細な時期不明である。

古代住居9（第94図、写真図版65）SI502

調査区東側に位置する。隣接するSI503南辺によって煙出しが切られている。平面方形で北辺中央やや西寄りにカマドが構築されている。カマドは西側の袖構築土がわずかな高まりで残存する。煙道は割り抜きであり、煙出しに向かって下傾斜である。煙道とカマド接続部で墨書きのある土師器高台皿が完形で出土した。出土遺物は9世紀前半の所産であり、住居の時期を示している。

古代住居10（第94図、写真図版66）SI503

調査区東側に位置する。SI502の煙出しが切り、SI505の南辺を切る。カマドは東辺中央やや南寄りに構築されており、燃焼部焼土と煙道が残るのみである。煙道は浅く、開削方法不明である。土師器が少量出土している。出土遺物および切り合いから9世紀後半の住居であると考えられる。

古代住居11（第95図、写真図版67）SI504

調査区東側に位置する。東半は中世前半の区画溝に切られている。北辺にカマドが構築されており、地山割り抜きの煙道が北方向へ延びる。カマドは構築土による高まりが存在する。カマド周辺や床面で土師器が多く出土している。出土遺物から9世紀前半から中葉の可能性が考えられる。

古代住居12（第96図、写真図版68）SI505

調査区東側に位置する。SI503に切りられ、SI507を煙道・煙出しへ切る。北辺にカマドが構築されているが、新旧2本の煙道が北向きに延びる。いずれも地山を割り抜いたものである。北辺中央が旧で、やや東寄りに位置する煙道が新設されたと考えられる。土師器が床面等で出土しており、出土遺物から9世紀前半の年代が想定される。

古代住居13（第98図、写真図版69）SI506

調査区東側に位置する。SI508と切り合があり、これを切っている。東辺にカマドが良好に残存しており、失われたカマド構築土の中から扁平礫が燃焼部焼土を挟むように立った状態で検出された。これらは芯材の礫であり、カマド構築時に据えられたものである。カマド脇には土師器甕が出土した。出土した土師器甕は8世紀代のものであると考えられ、住居もこの土器の年代に近いとみられる。

古代住居14（第99図、写真図版70）SI507

調査区東側に位置する。SI505の煙道および煙出に切られる。北東辺にカマドが構築されており、推定では地山を割り抜かれた煙道が北東方向に延びる。カマド燃焼部を覆うように多量の炭化物が層状に堆積しており、これらを除去すると燃焼部焼土が現れる。柱穴状の小ピットを検出したが、埋土上面から切り込まれている可能性が高い。比較的多くの遺物が出土した。出土した土師器および須恵器坏の特徴から7世紀後半から8世紀前半にかけての住居であると考えられる。土器以外にも鉄製品や紡錘車も出土している。

古代住居15（第100図、写真図版71）SI508

調査区東側に位置する。小形の竪穴住居である。一部をSI506によって切られている。南西辺にカマドがあり、カマドはわずかに構築土が認められる。煙道は地山を割り抜いたもので住居規模に比べるとやや長めの煙道である。出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、切り合いからみて古い段階の7・8世紀の住居である可能性が高い。

(福島)

古代住居16（第43図）SI201

調査区中央に位置する。北側低地帯に近在するため集落縁辺部の竪穴住居である。土師器・須恵器が多く出土した。鉄製品も刀子・鉢・鉄鎌が出土した。出土した土師器は9世紀代の特徴を見出すこ

とができるが、遺物の時期幅がある。そのため住居の帰属時期の詳細は9世紀代であり詳細不明である。

古代住居17（第44図、写真図版21）SI202

調査区中央に位置する。北側低地帯に近在するため集落縁辺部の整穴住居である。古代の土器が多く出土した。9世紀前半から後半のものがみられる。土器以外では、鍔吊金具と思われる鉄製品が出土した。

古代住居18（第45図）SI203

調査区中央に位置する。北側低地帯に近在するため集落縁辺部の整穴住居である。北西辺にカマドがあり、煙道も北西方向へ延びる。カマドは構築土が散乱する。

古代住居19（写真図版22）SI204

調査区中央に位置する。SI206と切り合うが先後不明である。

古代住居20（写真図版23）SI205

調査区中央に位置する。出土遺物は7世紀後半の土師器が多く出土した。住居の帰属時期も同様であると考えられる。土器以外では石製紡錘車が出土している。

古代住居21（写真図版23）SI206

調査区中央に位置する。SI204と切り合うが先後不明である。

(宮内)

古代住居22（第46図、写真図版24）SI212

調査区中央に位置する。近世墓群に切られる。床面では炭化した材が多く広がる。いわゆる焼失住居である。住居埋土上面より切り込んだピットで火山灰を検出した。分析の結果は十和田a火山灰であった。住居の埋没は降下以前である。それ以前埋土からは9世紀を主体とする土器類が出土した。9世紀代の住居であると考えられる。

(杉沢)

古代住居23（第49図、写真図版25）SI213

調査区中央に位置する。SI235・238を切る。北西辺にカマドが構築されており、煙道は2本並ぶように検出された。新段階のものが残存しており、このカマドは構築土で高まりが築かれている。構築土内には向かって左袖に土師器甕が逆さに埋め込まれていた。一方、向かって右袖には芯材として礫が芯材として埋め込まれていた。古段階のカマドは残存していないが、北西辺中央に煙道が残存している。いずれも地山を割り抜いたものである。中央にあったカマドが新段階で西側に造り替えられたものとみられる。出土遺物は古代の土器が多く出土した。遺物の特徴は9世紀であるため住居の年代も9世紀代でも中葉から後葉が妥当かもしれない。

古代住居24 SI215

調査区中央に位置する。平面略方形である。擾乱著しいため全容不明である。

古代住居25（第48図、写真図版32）SI233

調査区中央に位置する。その他多くの住居と異なり、カマドの残存が良好であるためカマドの破壊行為がなされていない。また、住居内からは多くの土器類が残されていた。これらのことから集落の最終段階の住居である可能性を指摘しておきたい。なお、出土土器もこれを補強するかのように10世紀のものが主体であると考えられる。住居も埋土に十和田a火山灰がみられないことから10世紀前半でも火山灰降下以前の住居であると考えられる。

(福島)

古代住居26（第53図、写真図版35）SI401

調査区西側に位置する。平面方形であり、北西辺にカマドが付属する。煙道も北西に向かって伸び、煙出しに向かって下り傾斜である。床面4隅にはそれぞれ4個の柱穴が検出された。床面は平坦に全面貼床が施されている。堀方は細かな凹凸が認められる。古代の土器が埋土や床面から出土した。出土遺物から9世紀前半の住居であると考えられる。なお、床面より下位で縄文住居SI412を確認した。

(川村)

古代住居27（第53図、写真図版36）SI402

調査区西側に位置する。SK408と重複、これを切る。削平のため遺構東半では壁面を検出できなかつた。平面形態は方形基調で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土の主体は炭化物を微量に含む暗褐色シルトである。北壁ほぼ中央でカマド1基を検出した。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれ、外端に向かって緩やかに下る。煙道は地山削り抜きである。埋土から土師器が少量、土玉1点が出土した。出土遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

(中村)

古代住居28（第54～56図、写真図版36）SI403

調査区西側に位置する。概ね北辺に新旧2箇所、西辺に1箇所、南に1箇所カマドが付属する。いずれも煙道は地山削り抜きである。北辺中央に位置するカマドおよび煙道が残存良好であるため最新のものであると考えられる。埋土中には礫が多く含まれており、中には被熱しているものも含まれる。床面には8個の柱穴が検出されたが、カマド変遷に伴って柱穴もスライドさせてあるようである。貼床は中央部以外全周施されている。埋土から古代の土器類が多く、土玉が1点、刀子が1点出土した。出土遺物から9世紀前半あるいは中葉頃の住居であると考えられる。

(川村)

古代住居29（第57図、写真図版37）SI404

調査区西側に位置する。北壁東寄りの位置でカマド1基を検出した（SI404カマド1）。SI404カマド1の残存部位は煙道、煙出しである。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。煙道構築方法は不明である。明瞭な現地性焼土は検出されなかった。床面の認識が困難であった。埋土から古代の土器が少量出土した。出土遺物から9世紀前半から中葉頃の住居であるとみられる。

古代住居30（第58図、写真図版37）SI405

調査区西側に位置する。削平のため壁はほぼ残存していない。床面はほぼ平坦である。黄褐色粘土による貼床が認められた。北辺ほぼ中央でカマド1基を検出した（SI405カマド1）。SI405カマド1の残存部位は現地性焼土と煙道である現地性焼土は楕円形である。煙道は外端に向かって緩やかに下る形状である。煙道構築方法は不明である。出土遺物は古代の土器片が少量出土した。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居31（第58図）SI408

調査区西側に位置する。SI410、SI413、SI416、SK418、SX401を切り、SI428に切られる。床面付近で検出したため、壁面形状の具体は不明である。貼床はない平坦な床面である。東壁北寄りの位置でカマド1基を検出した（SI408カマド）。SI408カマド1の残存部位は現地性焼土および煙道である。煙道は遺構床面とほぼ同じ高さから掘り込まれ、底面は平坦である。煙道構築方法は不明である。埋土から少量の土師器が出土した。遺物から9世紀前半から中葉頃の住居であるとみられる。

古代住居17（第59図、写真図版37）SI409

調査区西側に位置する。SI423、SI428に切られる。重機による表土除去時に本遺構カマドに伴う

現地性焼土を検出した。焼土周辺の検出を進めたところ、これに伴う炭化物粒を微量に含む暗褐色シルトの方形プランを認めたため竪穴住居と認識し調査した。床面は貼床のないほぼ平坦である。西壁でカマドを検出した。燃焼部は焼土のみ残存する。煙道や煙出しを検出することはできなかった。平安時代の土師器が少量出土したが、詳細な時期は不明である。

古代住居18（第59図、写真図版37）SI410

調査区西側に位置する。SI413を切り、SI408、SI428に切られる。重機による表土除去時に格子状に分布する炭化物塊範囲を認めた。炭化物塊周辺の検出を行ったところ、これに伴う炭化物粒を微妙に含む暗褐色シルトの方形プランを認めたため竪穴建物と認識し調査を行った。埋土は7層に分層した。主体は黒褐色シルトであり、自然堆積である。4・5・6層は焼失部材が土壤化したものである。4・5層は上下端のみが炭化し、内部は暗褐色シルトに土壤化していた。検出状況から考えると部材外辺部は延焼炭化したが、部材中心部は火が通らず炭化しなかったことが分かる。床面直上に薄く分布した7層は白色の灰層である。同層は床面直上の敷物（筵・藁・萱など）ないしは屋根の下地材と考えられる。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。床面直上に焼失部材が格子状に分布していた。検出状況から南北方向の材がサス、東西方向の材が母屋と比定され、屋根形状は東西棟の切妻屋根と考えられる。切り合いの問題はあるものの中世の竪穴建物の可能性もある。土師器が少量出土している。

古代住居19（第60図、写真図版38）SI411

調査区西側に位置する。小形、方形基調である。概ね北辺やや東寄りにカマドが付属する。煙道は北向きに延びる。カマドは破壊されており、芯材の礫がカマド周辺でまとまってみられた。平坦な床面で、柱穴はみられない。古代の土器片が出土している。出土遺物より9世紀前半の住居であると考えられる。

古代住居20 SI42

調査区西側に位置する。SI401の範囲内でこれに削平を受けた状態で検出された。床面範囲は平面方形であり、カマドは東側に位置している。カマドは燃焼部のみが残存し、煙道は深さのある東半のみが残存する。床面は平坦であり、中央以外は貼床が認められた。SI401と混在しているが、9世紀代の土師器片が少量出土した。この時期の住居であると考えられる。

（川村）

古代住居21（第60図、写真図版39）SI413

調査区西側に位置する。多数重複があり、SK418・SX401を切り、SI408・SI410・SI416に切られる。遺構上部に位置するSI410の床面を特定するために、縄文の遺物包含層である黒褐色シルトまで達するトレンチを入れた。トレンチ断面の観察結果、SI410の床面とは別の平坦面を認めたことから、竪穴建物の存在を想定した。ほぼ平坦であり、貼床はない。出土遺物は9世紀代の土師器、鉢状鉄製品が1点出土している。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居22（第61図、写真図版39）SI414

調査区西側に位置する。遺構の大半は調査区外北側へ広がる。SI415に切れられ、SI417・SK410を切る。暗褐色シルト中で、少量の炭化物粒を含む暗褐色シルトの方形プランとして検出した。方形基調である。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。古代の土器が少量出土しているが、詳細な時期を特定し得ない。

古代住居23（第61図、写真図版39）SI415

調査区西側に位置する。遺構の大半は調査区外北へ広がり、南西隅のみを調査した。SI414・SK411

を切り、SI417に切られる。埋土の主体は炭化物粒・焼土粒を微量に含む暗褐色シルトで、自然堆積である。ほぼ平坦で、貼床は認められない。古代の土器が少量出土しているが、時期の特定は難しい。

古代住居24 SI416

調査区西側に位置する。遺構の大半が擾乱を受けている。SI413を切り、SI408に切られる。埋土の主体は炭化物粒・焼土粒を微量に含む暗褐色シルトで、自然堆積である。ほぼ平坦で、貼床は認められない。土師器が少量出土している。出土遺物から9世紀後半から10世紀前半の住居とみられる。

古代住居25（第61図、写真図版39）SI417

調査区西側に位置する。SI414と重複し、これを切る。SI414床面精査時に本遺構カマドの煙出しを検出した。煙出しの北側に調査区際の壁面が位置したため、この壁面を確認したところ本遺構のものと思われる床面と煙道の一部を認めることができた。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。南壁西寄りと思われる位置でカマドを検出した。カマドの残存部位は煙道の一部と煙出しの下端である。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており外端に向かうにつれ、緩やかに傾斜する形状である。古代の土器片が少量出土したが、時期を特定できない。

古代住居26（第62図、写真図版40）SI418

調査区西側に位置する。SI420・426・427を切る。埋土の主体は黒褐色～暗褐色シルト主体で、自然堆積である。床面は、ほぼ平坦で、貼床はない。北壁東寄りの位置でカマドを検出した。カマドは焼土、煙道、煙出しである。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。埋土や床面から土師器、鉄鎌、土製紡錘車等が出土した。出土遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居27（第63図、写真図版40）SI420

調査区西側に位置する。SI446を切り、SI418、SI426に切られる。重複するSI418精査時にこれとは異なる暗褐色土の不鮮明プランとして検出した。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。9世紀代の土師器が出土した。出土遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居28 SI423

調査区西側に位置する。SI409を切る。重複するSI409の床面精査時に同遺構とは異なる遺構の煙道煙出しを検出した。カマドを持つ竪穴建物の存在を想定し、調査区際の壁面の精査を行ったところ、先述の煙道と連続する高さで竪穴建物床面と比定できる黄褐色シルトが薄く分布する平坦面を検出した。床面はほぼ平坦である。遺構床面には0～3cm程度の黄褐色シルトが薄く分布していたが貼床か否かの判断はできなかった。南壁で煙道を検出した。煙道構築方法は地山を削り抜いたものである。少量の土師器片が出土した。9世紀から10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居29（写真図版41）SI424

調査区西側に位置する。SI475を切り、SI443・SI447に切られる。遺構南壁でカマドを検出した。燃焼部焼土、煙道、煙出しが残存する。焼土直上にはカマド構築土と考えられる炭化物粒、焼土粒を多く含む黄褐色粘土が疎らに分布していた。煙道構築方法は地山削り抜きである。少量の土師器片が出土した。9世紀から10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居30（第62図、写真図版42）SI426

調査区西側に位置する。SI420・427・432、446・SK435を切り、SI418に切られる。北壁西寄りの位置で煙道および煙出しを検出した。カマドの明瞭な焼土は確認することはできなかった。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。古代の土器が少量出土している。こ

これら遺物から9世紀から10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居31（第63図、写真図版42）SI427

調査区西側に位置する。SI432・433・446を切り、SI418・426に切られるが、切り合い不明瞭である。方形基調でやや外傾しながら立ち上がる壁を有する。床年はほぼ平坦であり、貼床はない。土師器類が少量出土した。また、床面で銅椀が1点出土した。銅椀の内部には炭化物が多く残存している。出土遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居32（第64図、写真図版42）SI428

調査区西側に位置する。小形方形の竪穴住居である。SI408・409・410を切る。北壁東寄りの位置で煙道・煙出しを検出した。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれる形状で、外端に向かって緩やかに下降する形状である。土師器類が少量出土した。9～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居33（第64図、写真図版43）SI429

調査区西側に位置する。小形方形の竪穴住居である。概ね北壁にカマドの残骸が確認できた。礫を芯材とするカマドが構築されていたものと考えられる。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。少量の土師器類と床面から錫杖形鉄製品が出土した。出土遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居34（第65～67図、写真図版44）SI430

調査区西側に位置する。平面略方形である。3段階の変遷が認められ、それぞれA・B・Cとして調査した。最終段階はA、最古段階をCとしている。それぞれの段階で微妙に軸方向とカマド位置を変えている。出土遺物は土師器類が多く出土した。これら遺物から9世紀～10世紀にかけて変遷する住居であると考えられる。

古代住居35（第68図、写真図版45）SI431

調査区西側に位置する。SI433を切り、SI426・427に切られる。北東壁でカマドを検出した。カマドは破壊されていると考えられるが、両袖の高まりがわずかに残存している。カマド袖には芯材の小礫がまばらに認められる。床面は平坦で、壁周溝が巡る。9世紀代とみられる土師器少量と刀子が1点出土している。出土遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居36（第69図、写真図版46）SI432

調査区西側に位置する。SI433を切り、SI426・427に切られる。東壁中央で煙道を検出した。煙出しありや深く、煙道もそれに応じて煙出しに向けわずかに下り傾斜である。床面は平坦であり、貼床はない。遺物は少量の土師器片が出土している。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居37（第69図、写真図版46）SI433

調査区西側に位置する。遺構の東側大半が現代の大規模な擾乱を受けて失われている。床面は平坦であり、貼床はない。遺物は少量の土師器片が出土している。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居38（第70図、写真図版47）SI436

調査区西側に位置する。SI440・443・446・476、SK437を切り、SI447、SK428に切られる。平面方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北壁中央と東壁北寄りにそれぞれ煙道が認められる。北壁中央にはカマドの構築土が散乱しており、西壁には認められない。北壁中央のカマドが新しく構築されたものとみられる。また、中央北寄りには地床炉を検出した。周辺には炭化物や焼土粒が散在する。埋土より古代の土器が出土した。9世紀後半のものが含まれることから、9世紀後半～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居39（第71図、写真図版48）SI438

調査区西側に位置する。SI456を切り、SI422・439に切られる。深さが浅く、壁面形状の詳細は不明である。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。土師器片が少量出土した。また、刀剣の鐔が1点出

土した。9～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居40（第71図、写真図版48）SI439

調査区西側に位置する。SI438・456を切り、SI422切られる。方形基調で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。北壁中央付近でカマドを検出した。燃焼部焼土があり、煙道が外へ延びる。煙道底面は煙出しに向けてやや下降する。土師器片が少量出土した。また、鐵鏃1点、錫杖形鉄製品に付隨するとみられる鐸が出土した。これらから9～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居41（第72図、写真図版49）SI440

調査区西側に位置する。SI466・476を切り、SI436・443・447に切られる。北壁中央付近で煙道・煙出しを検出した。煙道構築方法は不明である。出土遺物はごくわずかであるが、土師器片が認められる。9世紀～10世紀の住居の可能性が高い。

古代住居42（第72図、写真図版49）SI441

調査区西側に位置する。SI442を切る。床面付近で遺構を検出したため、残存深さが少なく壁面形状は不明である。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。北壁西寄りの位置でカマドを検出した。残存部位は燃焼部焼土、煙道、煙出しである。焼土直上にはカマド構築土とされる炭化物粒・焼土粒を含む黄褐色粘土が分布していたカマド両袖に当たる部分ではフイゴ羽口が左右に分かれて直立しており、これが芯材として用いられたものと考えられる。9～10世紀の住居であるとみられる。

古代住居43（第73図）SI442

調査区西側に位置する。SI456を切り、SI441に切られる。西壁中央で燃焼部焼土、煙道、煙出しを検出した。焼土直上にはカマド構築土とされる炭化物粒・焼土粒を多く含む黄褐色粘土が分布していた。煙道底面は外端に向かうにつれ緩やかに傾斜するが、煙道構築方法は不明である。埋土より須恵器や土師器が出土した。出土遺物からみて9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居44（第73図）SI443

調査区西側に位置する。SI424・441・446・447・475を切り、SI436に切られる。カマド等は確認できなかった。平面方形で、床面は平坦である。出土遺物は土師器・須恵器が少量である。これらから9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居45（第74図、写真図版50）SI444

調査区西側に位置する。西壁北寄りの位置でカマドを検出した。燃焼部焼土はやや弱い被熱である。その上面には構築土が散乱し焼土を被覆していた。煙道は地山削り抜きであるとみられる。土師器・須恵器が出土した。これらから9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居46（第75図、写真図版51）SI445

調査区西側に位置する。北壁中央でカマドを検出した。燃焼部焼土上面には構築土が散乱し焼土を被覆していた。煙道は地山削り抜きであるとみられる。土師器・須恵器が出土した。これらから9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居47（第75図）SI446

調査区西側に位置する。SI706・SK435を切り、SI420・426・427・436・443・SX402・SX403に切られる。平面方形基調であるが、カマドは認められない。床面は平坦であり、貼床はない。埋土から少量の土師器・須恵器が出土した。出土遺物から9世紀後半以降の住居であると考えられる。

古代住居48（第76図）SI447

調査区西側に位置する。SI424・436・440を切り、SI447・443に切られる。埋土は自然堆積であ

り、炭化物粒を微量に含む。床面は平坦で、貼床はない。出土遺物は古代の土器が多く出土した。これらの特徴から9世紀前半の住居であると考えられる。

古代住居49（第76図）SI448

調査区西側に位置する。SI460・461・465・466を切り、SI448に切られる。平面形態は南壁が北壁に比べてやや長い台形状である。ほぼ垂直に立ち上がる。埋土の主体は炭化物粒を微量に含む暗褐色シルトであり、自然堆積である。床面ほぼ平坦であり、貼床はない。少量の土師器が出土した。古代の住居の可能性が考えられる。

古代住居50（第77図）SI449

調査区西側に位置する。SI452、SK441・442を切り、SI451に切られる。平面方形基調でカマドは認められない。床面ほぼ平坦であり、貼床はない。少量の土師器が出土した。古代の住居の可能性が考えられる。

古代住居51（第77図、写真図版52）SI450

調査区西側に位置する。SI450を切り、SI451に切られる。北壁中央でカマドを検出した。カマドには煙道・煙出しが伴う。燃焼部焼土直上にはカマド構築土と考えられる炭化物粒・焼土粒を多く含む黄褐色粘土が分布していた。土師器・須恵器等が少量出土した。出土遺物から9世紀後半～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居52（第78図）SI451

調査区西側に位置する。SI449・450・452・458を切り、SI451に切られる。平面は方形であるとみられる。床面付近で検出したため断面形状は不明である。埋土の主体は黄褐色シルトを微量に含む暗褐色シルトである。床面は平坦であり、貼床はない。鉄製の鐸が1点出土している。古代から中世の建物であると考えられる。

古代住居53（第78図、写真図版53）SI452

調査区西側に位置する。SI457・458を切り、SI449・451に切られる。埋土の主体は炭化物粒と黄褐色シルトを微量に含む暗褐色シルトである。堆積の様相は自然堆積である。北壁中央でカマドを検出した。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、外端に向かうにつれ緩やかに下降する形状である。出土遺物は土師器が少量であり、これらから9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居54（第79図）SI453

調査区西側に位置する。SI454・463を切り、SI453に切られる。SI453・454・463・SK474の遺物は取り上げの段階で混ざってしまった可能性がある。平面方形基調で、貼床のない平坦な床面である。土師器類が少量出土した。9世紀～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居55（第79図）SI454

調査区西側に位置する。SI455・463、SK474を切り、SI453に切られる。北壁でカマドを検出した。燃焼部焼土・煙道・煙出しが認められる。煙道は地山削り抜きによる構築である。出土遺物は土師器・須恵器が出土した。8～10世紀までの遺物が混在している。

古代住居56（第80図、写真図版53）SI455

調査区西側に位置する。SI455・463、SK474を切り、SI454・453に切られる。北壁で煙道を検出した。煙道底面は外端に向かうにつれ緩やかに下降する形状であり、地山を削り抜いて構築されていると考えられる。他の住居と区別難しいが、土師器が出土している。

古代住居57（第80図、写真図版53）SI456

調査区西側に位置する。SK429を切り、SI422・438・439・455に切られる。北壁中央でカマドを検

出した。燃焼部焼土、カマド左右袖の芯材と考えられる直立した二枚の板状礫、煙道、煙出しである。焼土直上にはカマド構築土と考えられる炭化物粒・焼土粒を多く含む黄褐色粘土が分布している。古代の土器が少量出土した。遺物からみて9世紀後半～10世紀の住居であると考えられる。

古代住居58（第81図、写真図版54）SI457

調査区西側に位置する。SI452に切られる。カマドは確認できない。SI452に切られた範囲に存在する可能性が考えられる。床面はほぼ平坦である。遺構全体に3cm程度の厚さで炭化物粒を微量に含む暗褐色シルトの貼床が認められた。少量の土器が出土している。古代の住居であると考えられる。

古代住居59（第81図、写真図版54）SI458

調査区西側に位置する。SI467・468を切り、SI451・452に切られる。東壁で平行する煙道2基を検出した。いずれも焼土がみられる。床面はほぼ平坦である。床面全体で疎ら黒褐色シルトを多く含む暗褐色シルトによる1～8cm程度の貼床が認められた。土師器・須恵器・鉄製品が出土した。出土遺物より9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居60（第82図、写真図版54）SI459

調査区西側に位置する。SI460・464・468・479・480を切る。北壁中央でカマドを検出した。カマドの燃焼部焼土が残存する。煙道・煙出しなどを検出すことはできなかったが、焼土が壁際付近に位置していたため地焼炉とは考えずカマドの焼土と考えた。古代の土器と鉄製品が出土した。9世紀～10世紀にかけての住居であると考えられる。

古代住居61（写真図版55）SI460

調査区西側に位置する。SI464・479を切り、SI445・448・459に切られる。方形基調であると考えられるが、他の遺構に切られ全容は不明である。平坦な床面であり、貼床はみられない。少量の土師器と鉄製鎌1点が出土した。古代の住居であると考えられるが、詳細な時期は不明である。

古代住居62（第82図）SI461

調査区西側に位置する。SI465・466・477・481、SK468を切り、SI448に切られる。床面はほぼ平坦である。カマドが位置する東壁を除く三方の壁際を中心に黒褐色シルトを多く含む暗褐色シルトによる3～5cm程度の貼床を確認した。東壁でカマド2基を検出した（SI461カマド1・SI461カマド2）。東壁北側に位置するカマド1の残存部位は焼土、煙道、煙出しだある。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、平坦に伸びる形状である。地山削り抜きである。東壁中央に位置するSI461カマド2の残存部位は煙道と煙出しだある。煙道は地山を削り抜いて構築されている。このカマドが古段階であると考えられる。出土遺物は古代の土器、鉄製品などが出土した。9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居63（第79図）SI463

調査区西側に位置する。SI453・454に切られる。北壁中央でカマド1基を検出した。燃焼部焼土、煙道、煙出しだある。煙道構築方法は不明である。少量の土師器類が出土した。9世紀代の住居の可能性が考えられる。

古代住居64（第83図、写真図版55）SI464

調査区西側に位置する。SI468・479・480・SK469・713を切り、SI459・460に切られる。ほぼ平坦な床面である。カマドが位置する東壁以外の三方の壁付近を中心に微量の炭化物粒を含む5cm程度の暗褐色シルトの貼床が認められた。東壁北寄りの位置でカマドを検出した。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面は外端に向かうにつれ緩やかに上昇する形状である。少量の土師器が出土した。これら遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居65（第84図、写真図版56）SI465

調査区西側に位置する。SI479を切り、SI448・461に切られる。床面はほぼ平坦である。遺構全体に5cm程度の黄褐色シルトを微量に含む暗褐色シルトの貼床が認められた。壁東寄りの位置でカマドを検出した。燃焼部焼土、煙道、煙出しからなる。焼土直上にはカマド構築土の残骸と考えられる炭化物粒・焼土粒を多く含む黄褐色シルトが分布していた。焼土中央はレンズ状に窪む形状である。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面は外端に向かうにつれ緩やかに上がる形状である。地山を削り抜いて構築されている。出土遺物は少量の土師器片と土製紡錘車片がみられる。古代でも古い段階の住居の可能性もある。

古代住居66（第84図、写真図版56）SI466

調査区西側に位置する。SI440・448・461・476に切られる。SI461の煙道・煙出し精査時に同遺構埋土とは質感の異なる炭化物粒を含む暗褐色シルトを認めた。同所付近の検出を行ったところ暗褐色シルトの方形プランを認めた。カマドはみられない。出土遺物は少量の土師器片と土製紡錘車片がみられる。古代でも古い段階の住居の可能性もある。

古代住居67（第85図、写真図版56）SI468

調査区西側に位置する。SI480・SI458・459・464に切られる。埋土の主体は炭化物粒を微量に含む暗褐色シルトで、自然堆積である。埋土中層から下層にかけて炭化物粒の集中層が認められた。埋土より土師器・須恵器が出土した。出土遺物より9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居68（第86図、写真図版57）SI470

調査区西側に位置する。SI474を切る。当初はSI470とSI474を同一遺構と認識していた。上面で視認ことができた暗褐色シルトの方形プランに合わせ適宜トレンドを入れ調査したところ、黄褐色シルトの地山層に到達する以前に炭化物粒を多く含む平坦面を認めた。このため、前述の暗褐色プラン中には二棟の竪穴住居が存在する可能性を想定し、前述の炭化物粒を多く含む平坦面から掘り込まれた煙道および煙出しを検出することができたため、これをより上層に位置する竪穴住居の床面と認識し精査を行った。遺構南半は重機掘削時に削平されており、煙道以外は失われている。少量の土師器・須恵器が出土しており、鉄製品（鉤）が1点出土した。9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居69（第87図、写真図版57）SI471

調査区西側に位置する。SI474を切る。床面はほぼ平坦である。遺構南半を中心に2～3cm程度の暗褐色シルトの貼床が認められた。北壁中央でカマドを検出した。焼土、カマド左袖の芯材と考えられる直立した板状礫、煙道、煙出しからなる。カマド袖の芯材と考え得る板状礫は礫を据え付ける部分のみを掘り窪める方法で設置されていた。土師器が出土した。出土遺物からみて9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居70（第87図、写真図版58）SI472

調査区西側に位置する。SK461に切られる。床面中央部はほぼ平坦だが外端に向かうにつれ3cm程度緩やかに床面が上がる形状である。カマド付近のみ黄褐色シルトを微量に含む暗褐色シルトによる3cm程度の厚さの貼床が認められた。北壁中央でカマドを検出した。煙道構築方法は地山を削り抜きである。少量の土師器が出土した。遺物から9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居71（第88図、写真図版59）SI473

調査区西側に位置する。平面方形基調であり、貼床のない平坦な床面である。北壁でカマド2基を検出した。より東側に位置するカマドは焼土、煙道、煙出しからなる。焼土中央はレンズ状に窪む形状であった。煙道構築方法は不明である。より西側に位置するカマドは焼土、煙道、煙出しからな

る。このカマド焼土がより下面に位置することより、これが新しく廃絶段階に機能していたことが予想される。少量の土器類が出土した。8～9世紀の住居であるとみられる。

古代住居72（第89図、写真図版60）SI474

調査区西側に位置する。SI470を切り、SI47に切られる。漸移層中で暗褐色シルトの不鮮明プランとして検出した。地山平坦面を床面とする竪穴住居と、これより一段高い炭化物粒を多く含む平坦面から掘り込まれた竪穴住居の二棟が存在する可能性を考慮し精査を行った。北壁東寄りの位置でカマド1基を検出した。焼土、左右カマド袖の芯材及び支脚と考えうる直立した板状礫、煙道、煙出しを見出した。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、外端に向かって緩やかに下降する形状である。煙道の構築方法は地山削り抜きである。古代の土器が出土した。これらは9世紀代のものであることからこの時期の住居であると考えられる。

古代住居73（第90図、写真図版61）SI475

調査区西側に位置する。SI424・443に切られる。南壁中央でカマドを検出した。煙道と煙出しのみである。現地性焼土が存在したと考えられる位置では、他所の埋土よりも多くの焼土粒と黄褐色シルト粒の分布が認められたが、明瞭な現地性焼土それ自体は検出できなかつた。出土遺物は少量の土器である。遺物から9世紀代の住居であると思われる。

古代住居74（第90図、写真図版62）SI476

調査区西側に位置する。SI466を切り、SI436・440・437に切られる。北壁中央でカマドを検出した。煙道と煙出しのみである。燃焼部焼土が位置したと考えられる位置では焼土粒と炭化物粒を多く含む黄褐色シルト塊が分布していたが、明瞭な現地性焼土検出することはできなかつた。9世紀前半頃の土器類が出土した。そのためこの時期の住居であると考えられる。

古代住居75（第91図、写真図版63）SI477

調査区西側に位置する。SI481を切り、SI461に切られる。南壁中央でカマド1基を検出した。は煙道、煙出しのみである。燃焼部焼土が位置したと考えられる部分では他所の埋土よりも多く焼土粒・炭化物粒が分布していたが、明瞭な現地性焼土を検出することはできなかつた。調査では床面まで到達していない可能性がある。土器が少量出土した。時期は古代であるが、詳細不明である。

古代住居76（第91図、写真図版63）SI478

調査区西側に位置する。SI719・720・724・SK471・710・713をそれぞれ切る。床面は平坦である。北壁以外の三方の壁付近を中心に黄褐色シルトを微量に含む暗褐色シルトによる5cm程度の貼床が認められた。北壁中央でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土、カマド右袖の芯材と考え得る板状の礫、煙道、煙出しがらなる。焼土直上にはカマド構築土の残骸と考えうる焼土粒・炭化物粒を含む黄褐色シルトが厚く堆積していた。焼土中央部分はレンズ状に壅む形状である。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれる形状で、底面はほぼ平坦に伸びる形状である。カマド芯材の礫は礫を設置する部分のみ掘り壅めたものであった。土器が一定量出土した。また、刀剣類の鐔が1点出土した。出土遺物から9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居77（第92図、写真図版64）SI479

調査区西側に位置する。SI480を切り、SI459・460・464・465を切る。平坦な床面で、貼床はない。西壁や北寄りでカマドを検出した。燃焼部焼土が存在したと考えられる部分の埋土は他所に比べ多くの黄褐色シルト・炭化物粒・焼土粒を含んでいたが、明瞭な焼土は検出できなかつた。シャイエンツの土器が出土した。古代の住居であると考えられる。

古代住居78（第92図、写真図版64）SI480

調査区西側に位置する。SI459・464・467・468・479に切られる。南壁中央部分でこの方形プランと連続し、煙道と想定しうる溝状プランを認めたことから住居跡と認識し精査を行った。南壁東寄りの位置でカマド1基を検出した。燃焼部焼土、煙道、煙出しからなる。詳細な時期不明であるが、多数の遺構に切られているため古い段階の住居であると推測される。

古代住居79（第93図、写真図版64）SI481

調査区西側に位置する。SI717、SK436・SK709を切り、SI461・477に切られる。北壁中央の位置でカマドを検出した。燃焼部焼土、煙道からなる。焼土直上にはカマド構築土の残骸と考えられる焼土粒・炭化物粒・土師器片を含む黄褐色シルトが厚く分布していた。煙出しへSI461によって削平され失われている。煙道は地山を割り抜いて構築されている。土師器・須恵器が多く出土した。出土遺物から9世紀前半の住居であると思われる。

(中村)

古代住居80（第100図、写真図版72）SI701

調査区西側に位置する。堀1によって切られている。北辺中央、東辺中央にそれぞれカマドがみられる。いずれも燃焼部焼土が残存している。東側カマド周辺には構築土や礫が散在しており、このことから東側カマドが新設されたものと考えられる。土師器・須恵器が少量出土した。いずれも9世紀前半のものである。

古代住居81（第101図、写真図版73）SI702

調査区西側に位置する。北辺中央にカマドがみられ、床面には燃焼部焼土が残存している。カマド構築土が散乱するが形状は留めていない。土師器・須恵器が少量出土した。また、鉄鏃1点が出土した。出土遺物から9世紀前半の住居であると考えられる。

古代住居82（第102図、写真図版74）SI703

調査区西側に位置する。北東隅は攪乱によって失われている。西辺にカマドがみられる。カマドは芯材の礫が左右列状に検出された。煙道は煙出しに向下降し、地山を割り抜いて構築されている。少量の土師器が出土した。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居83（第103図、写真図版75）SI704

調査区西側に位置する。中央をSK462によって切られ、SK473を切る。北辺やや東寄りにカマドがみられる。煙道は地山を割り抜いて構築されている。土師器・須恵器が出土した。出土遺物から9世紀前半の住居であると考えられる。

古代住居84（第103図、写真図版76）SI705

調査区西側に位置する。北辺にカマドがみられる。煙道は地山を割り抜いたものである可能性も考えられる。また、床面には焼土炭化物が薄い層状にみられる。埋土より土師器・須恵器等が出土した。いずれも9世紀代のものであり、住居もこの時期に該当するとみられる。

古代住居85（第104図、写真図版77）SI706

調査区西側に位置する。SI442に切られる。北辺ほぼ中央にカマドがみられ、煙道が北向きに延びる。カマドには基底部とみられる芯材の礫が残存する。構築土が散乱しており、カマドは破壊を受けた可能性が高い。土師器類が出土した。出土遺物からみて9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居86（第104図、写真図版78）SI708

調査区西側に位置する。SK448に切られる。平面方形であるが、カマドはみられなかった。少量の土器類と鉄鏃1点が出土した。9世紀以降の建物であると考えられる。

古代住居87（第105図、写真図版79）SI709

調査区西側に位置する。検出が困難であったが、焼土および炭化物の広がりで確認した。北東辺に短い煙道がみられるが、焼土は検出できなかった。床面には2個の柱穴がみられ、それぞれこの床面に伴うものであると判断した。土師器片が少量出土した。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居88（第105図、写真図版79）SI710

調査区西側に位置する。SK465によって切られる。北辺やや東寄りにカマドがみられる。煙道は北向きに延びるが、底面は煙出ししまでほぼ平坦な作りである。埋土から少量の土師器が出土した。土器は概ね9世紀代のものがみられ、この時期の住居であると考えられる。

古代住居89（第106図）SI712

調査区西側に位置する。平面略方形の小形堅穴住居である。カマドは東辺にみられ、カマドは石組が残存する。おそらくカマド芯材の礎であると推測される。土師器が少量出土した。出土遺物から9世紀代の住居であるとみられる。

(福島)

古代住居90（第106図、写真図版80）SI715

調査区西側に位置する。SI717煙出し、SK459が切る。北辺にカマドがみられ、芯材として用いられた礎が残存する。少量の土師器が出土した。8世紀代の住居である可能性が考えられる。

古代住居91（第107図、写真図版81）SI716

調査区西側に位置する。東側は攪乱を受けており全容不明である。カマドは残存範囲では確認できないが、北側床面に焼土がみられる。少量の土師器が出土した。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居92（第107図、写真図版82）SI717

調査区西側に位置する。SI715を切り、SI48に切られる。東壁中央の位置でカマドを検出した。燃焼部焼土、煙道、煙出しがある。焼土直上にはカマド構築土と考えられる被熱した黄褐色粘土や灰、中量の炭化物粒などが堆積していた。土師器が少量出土した。これらから9世紀代の住居であるとみられる。

古代住居93（第108図、写真図版83）SI718

調査区西側に位置する。SI719・722・724、SK714・715を切り、SI721、SK711に切られる。北壁中央の位置でカマドを検出したが、煙出しみの他の遺構によって失われている。床面西側を中心に10cm程度の貼床を検出した。貼床はSI718が存在する北壁中央の位置を除く遺構外縁部に限定して検出された。貼床範囲から考えると本遺構は成立当初段階、正方形に近い掘方をもつ住居であったが、のちに東側に堀方範囲を拡張していた可能性が高い。9世紀代の土師器と8世紀代の土師器が混在して出土した。

古代住居94（第109図、写真図版84）SI719

調査区西側に位置する。SI720・SI724を切り、SI718・478・481、SK708に切られる。三方に堀方が巡る。出土遺物は土師器が少量出土したのみである。詳細な時期不明である。

古代住居95（第108図、写真図版84）SI720

調査区西側に位置する。SI722・723・724を切り、SI478に切られる。南壁中央でカマドを検出した。カマドは煙道・煙出しがある。残存状況が悪く、詳細が掴めなかった。出土遺物は土師器が少量出土したのみである。詳細な時期不明である。

(中村)

古代住居96（第109図、写真図版84）SI721

調査区西側に位置する。SI718を切り、SI703、SK702・707・460を切る。平面方形で平坦な床面を検出した。北壁では煙道を検出した。出土遺物は8～9世紀の土師器が出土した。9世紀前半頃の住居であると思われる。

(光井)

古代住居97（第110図、写真図版85）SI724

調査区西側に位置する。SK710を切り、SI478・718・719、SK708・711に切られる。東壁中央の位置でカマドを検出した。煙道と煙出しが残存する。土師器壺が1点出土した。9世紀代の住居であると考えられる。

古代住居98（第111図、写真図版85）SI725

調査区西側に位置する。SI701に切られる。北壁中央でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土、煙道、煙出しがある。焼土直上にはカマド構築土と考えられる中量の焼土粒混じりの黄褐色粘土が広く堆積していた。少量の土師器片が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居99（第111図、写真図版85）SI726

調査区西側に位置する。SI727・739を切り。北壁中央でカマドを検出した。カマドは煙道・煙出しがある。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、外端にむけ緩やかに上昇する形状である。地山を削り抜いて構築された可能性が考えられる。出土遺物は土師器・須恵器・管玉1点である。遺物から9世紀前半の住居であると考えられる。

古代住居100（第112図、写真図版86）SI727

調査区西側に位置する。SI728・739を切り、SI726に切られる。西壁中央でカマドを検出した。燃焼部焼土・煙道・煙出しがある。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居101（第113図、写真図版86）SI728

調査区西側に位置する。SI727・739、壠1に切られる。概ね平面方形であると考えられる。床面は平坦であり、貼床はない。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居102（第113図、写真図版86）SI729

調査区西側に位置する。SK716を切り。北壁中央でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土・煙道・煙出しがある。カマド袖芯材と考えられる二個の直立した板状礎を検出した。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居103（第114図、写真図版87）SI730

調査区西側に位置する。床面はほぼ平坦であり、貼床はない。西壁中央でカマドを検出した。カマドは煙道・煙出しがある。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居104（第114図、写真図版87）SI731

調査区西側に位置する。床面は平坦であり、貼床はない。北壁中央でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土とカマド袖芯材と考えられる直立した板状礎で構成されている。板状礎は礎を据え付ける部分のみを掘り進め、礎を立てる方法で設置されていた。明瞭な煙道を検出することはできなかつた。出土遺物は少量の土師器が出土した。9～10世紀にかけての住居とみられる。

古代住居105（第115図、写真図版87）SI732

調査区西側に位置する。北壁中央でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土・煙道・煙出しがある。カマドには袖芯材と考えられる直立した板状礎がみられる。煙道構築方法は不明である。板状礎

はこれを据え付ける部分のみを掘り窪め、礫を立てる設置方法だった。

古代住居106（第115図、写真図版88）SI733

調査区西側に位置する。南壁中央でカマドを検出した。カマドは煙道・煙出しからなる。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。出土遺物は土製紡錘車が1点出土した。8～9世紀前半の住居である可能性が考えられる。

古代住居107（第116図、写真図版88）SI734

調査区西側に位置する。SI701・堀1に切られる。北壁でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土・煙道である。煙道は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、底面は外端に向かって緩やかに上昇する形状である。煙道外端は擾乱によって削平されていた。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

(中村)

古代住居108（第116図、写真図版88）SI736

調査区西側に位置する。SI738・746・748、SK718に切られる。平面は方形であると思われるが、大半は調査区外南へ広がる。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居109（第117図、写真図版89）SI737

調査区西側に位置する。SI732に切られる。西壁中央にカマドを検出した。カマド本体は残存していないが、燃焼部焼土および煙道を検出した。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

(光井)

古代住居110（第117図、写真図版89）SI738

調査区西側に位置する。SI736・743を切り、SI739に切られる。平面方形、東壁でカマドを検出した。燃焼部焼土・煙道・煙出しからなる。土師器類および土製紡錘車が1点出土した。出土遺物から9世紀前半の住居であるとみられる。

古代住居111（第118図、写真図版89）SI739

調査区西側に位置する。SI728・738・745を切る。平面長方形である。北壁中央でカマドを検出した。燃焼部焼土・煙道・煙出しからなる。焼土付近にはカマドの芯材と考えうる板状礫と、カマド構築土と考えられる被熱した黄褐色粘土塊が散在していた。現地性焼土を挟む左右には、袖芯材である板状礫を据え付けた堀方が認められた。焼土中央は浅く窪んでおり形状はレンズ状である。煙道は地山を割り抜いて構築されている。土師器類が出土した。9世紀後半から10世紀にかけての住居であるとみられる。なお、SI749は同一の遺構を指す。

古代住居112（第119図、写真図版90）SI743

調査区西側に位置する。SI738に切られる。隅丸方形の平面形態で、遺構の大半は調査区外南へ広がる。土師器・須恵器片が出土した。9世紀から10世紀にかけての住居であるとみられる。

古代住居113（第119図）SI745

調査区西側に位置する。SI739・746、堀1に切られる。南壁中央でカマドを検出した。カマドは燃焼部焼土・煙道・煙出しからなる。燃焼部焼土中央には支脚と考えられる角礫が立てられていた。煙道底面は外端に向かうにつれ緩やかに上昇する形状である。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居114（第119図、写真図版90）SI746

調査区西側に位置する。SI739・745を切り、SI747に切られる。平面方形であると考えられる。カ

マドは検出されなかった。土師器・須恵器が少量出土した。9世紀前半頃の住居であるとみられる。
古代住居115（第120図、写真図版90）SI747

調査区西側に位置する。SI736・739・746・748を切る。西壁中央で煙道・煙出しを検出した。少量の土師器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

古代住居116（第120図）SI750

調査区西側に位置する。SI739に切られ、北向きにわずかに延びる煙道・煙出しのみ残存する。出土遺物もなく、詳細不明である。

（中村）

古代住居117（第121図、写真図版91）SI803

調査区西側に位置する。現代のトレンチャーによる擾乱を受け、堀1に東側が切られる。北西壁でカマドを検出した。燃焼部とカマド袖基底部が残存する。煙道は地山を削り抜いたものである可能性がある。床面は平坦で、4個の柱穴が認められた。貼床が存在し、カマド側以外は壁際に堀方を有する。埋土や床面から土師器・須恵器等が出土した。遺物からみて9世紀代の住居であると考えられる。

（光井）

古代住居118（第122図、写真図版92）SI805

調査区西側に位置する。西半を堀1に切られる。東壁に煙道を2基検出した。東壁中央付近の煙道は長く、燃焼部焼土を伴う。一方、やや南に位置する煙道は燃焼部焼土が認められない。このことから短く南寄りの煙道が古段階のものであると考えられる。床面には堀方を有し、貼床が施されている。土師器・砥石が出土した。遺物から9世紀代の住居であると考えられる。

（西澤・澤目）

（2）祭 祀 遺 構

祭祀遺構1（第128図、写真図版95）SX201

調査区中央に位置する。南北方向の溝部とその中心の落ち込み部で構成されている。Ⅲb層上面で溝を検出しが、中央部分は検出困難であった。中心の落ち込み部は中世の堅穴建物が上面に築かれており、南側溝部は堀1によって切られ、北側溝部は大規模な現代の擾乱によって失われている。中世以前に埋没した遺構であることは間違いない。溝部はおよそ南北方向に緩やかな曲線で延びる。堀1を直線的に越えて検出できなかったため堀1の位置で屈曲し、いずれかの溝に繋がるものと考えた。これに該当する溝は様々な特徴からSD209が適当であると想定した。

中心の落ち込み部は平面梢円形を呈する。溝部との切り合は認められず、一連の遺構であると考えられる。遺構埋土は自然堆積であり、相違の乱れも不純物もほとんど含まないが、落ち込み部最下層には炭化物の小粒が含まれる。落ち込み部底面には礫が大小敷き詰められており、その礫の隙間に古の土器の微細片が無数に挟まっている。土器は器種すらわからないほど粉砕されており、相当数の個体数があるものと思われる。土器は土師器が多いが、須恵器片も少量ながら認められる。溝部底面から落ち込み部底面には水の存在を示す鉄分の沈着が認められる。持ち込み部底面は溝部底面からの連続性が平面的にも追跡できる。特に礫敷きが溝部からの連続で溝状に途切れている。類例を知らないため断定はできないが、流水と滞水をコントロールした施設であると推測される。また、礫敷き底面には破碎された土器片のみならず、鉄製品が3箇所において礫直上で出土した。1点は馬鎌、1点は鋒先、1点は刀剣である。特に刀剣は刃部が半分以上欠損している。また、同様の出土状況で

馬歛も多く認められる。このような状況から意図的に遺物を廃棄するような祭祀行為が想定される。どのような目的の祭祀なのか不明であるが、馬歛、鋤先、水を利用することから農耕祭祀の儀礼の一場で構築された遺構であると推測する。遺構の時期は遺構面や切り合いから中世前半以前、出土遺物から9世紀頃のものである可能性が高い。また、この遺構に近接する平安時代の堅穴住居がないためこの年代を補強するものであると付記する。

(3) 土 坑

多数検出した古代の土坑のうち、平面長方形を呈し、壁が急角度で立ち上がるものを墓壙と想定し、これらを中心に掲載した。おもに調査区西側に集中し、大半が堅穴住居よりも下位で検出される。古代、墓域であったエリアに時間を経て居住域が広がったものと考えられる。

SK202 (第125図、写真図版96)

調査区中央や東寄りに位置する。南北方向に長軸を持つ平面長方形の土坑である。壁面は四方とも垂直に立ち上がる。埋土は大まかに上下2種類に分割でき、上半は炭化物と各種地山ブロックが多く混じり、下半は炭化物が少ないブロック混じりである。遺構は掘削後すぐに埋め戻された可能性が高く、形態からも土壙墓であると考えられる。南側埋土から管玉が出土している。底面出土ではないため、副葬されたものであるとは断定できない。管玉は出雲産、出雲系工人の作である（廣瀬時習氏・大賀克彦氏のご教示による）。

(福島)

SK718 (第126図、写真図版97)

調査区西側に位置する。小土坑である。SI738の埋土を切る。底面より方頭太刀が1振出土した。墓壙ではないと考えられるが、太刀を埋納する行為がおこなわれたと考えられる。ただし鞘やそれに付属する金具類がみられないため抜き身であったようである。

(光井・福島)

(4) 溝

この時代の主となる遺構である堅穴住居や土坑以外に溝、柱穴なども検出している。

溝4 SD201

調査区中央に位置する。北西から南に向かって緩やかに曲がりながら延びる。堀1に切られるが、部分的に堀1に接して延びているため大きくクランクする溝であると考えられる。埋土から古代の遺物が出土した。特に、湖西産須恵器や管玉は特筆すべき遺物である。

溝5 SD209

調査区中央に位置する。古代の遺物が埋土から出土した。方向や規模から祭祀遺構としたSX201の溝部に繋がると考えられる。なお、これら溝が繋がると、SD201と平行するようにもみることができる。出土遺物はから9世紀であると考えられる。

(福島)

(5) 古代の土器

本項では、土師器・須恵器（分類記号B）など古代の土器について詳述する。土師器・須恵器は7・8世紀のものから9・10世紀のものが出土した。その大半が堅穴住居を中心とする遺構より出土した。また、平安時代の土師器壺に非常に粗い胎土で作りも粗雑なものが一定量認められる。これら

はこの遺跡に特有の土師器坏である点が注目される。須恵器については、岩手県沿岸地方で窯跡が確認されていないため現段階ではいずれも搬入品であると考えられる。県内の窯跡では奥州市江刺区瀬谷子窯跡須恵器が出土している。さらに遠隔地から搬入されたと推測される須恵器も出土している。静岡県浜松地方の湖西産須恵器、福島県会津地方の大戸窯産須恵器などである。

堅穴住出土土器 (第210～262図、写真図版198～234)

B1～819は、堅穴住居より出土した古代の土師器・須恵器である。これらのうち、B1～399は土師器および須恵器の坏・皿・高坏等供膳具であり、B400～410は土師器鉢である。B411～714は煮沸具の土師器壺類、B715は瓶、B716～753は土師器壺、B754～819は須恵器壺・壺等の貯蔵具である。

B1～208は、ロクロによる調整があり内面にミガキ・黒色処理された土師器坏である。いずれも帰属年代を示す特徴より9世紀前半から10世紀前半のものと考えられる。出土した供膳具の大部分はこれらで占められており、平安時代前半に位置付けられるこの集落において、主たる供膳具であったことを示している。調整は、いずれも外面に回転ナデによる凹凸の調整痕跡が確認され、内面はミガキが施されている。これらのうち5点(B39・49・61・64・104)は回転ナデが指ではなく工具が用いられている点でその他と異なる。内面のミガキは非常に細かなものも一定量認められる。平面井桁状や多角形を描くようにミガキが施される個体もあり、より丁寧なミガキであると思われ、より古粗の特徴を示していると考えられる。また、体部下半に回転ヘラケズリやケズリが施されている個体も一定程度みられる。体部下端の回転ヘラケズリは、9世紀前半の瓶類にも認められる技法である。このことから土師器坏においても9世紀代のうち前半代に位置付けられると考えられる。底部の切り離しについては、残存するものの大半が回転糸切りの認められるものであり、底部が残存しているにも関わらず切り離しが不明な個体は、どれもヘラケズリによって消失しているものである。しかし、これらも形態的特徴からみて本来は回転糸切りによるものである可能性が高い。寸法から概ね大中小の3分類が可能であり、さらに器形も3分類が可能である。これら土師器坏類のうち体部外面に墨書が認められる7点、刻書が認められる3点も含んでいる。墨書は「人」と判読できる3点、「十」・「大」と判読できる各1点であるが、その他は判読不能である。一方、刻書はいずれも焼成後の線刻で、「井」の字状のもので占められているが、文字か記号か判断できない。

B209～221は、ロクロによる調整があり、内外面ともにミガキが施され、黒色処理された土師器坏である。下半が欠損しているものの中には有高台の個体が含まれている可能性もある。底部が残存する個体のうち1点を除いて全て回転糸切り後の調整が施される。調整は回転ヘラケズリされるものと、ミガキが施されるものに分かれる。B219・222のように器高の低い個体も存在する。黒色処理以外は概ね他の土師器坏と共に通する特徴を有することや共伴関係から他の土師器坏類と同時期のものであると考えられる。

B223～249は、ロクロによる調整があり、黒色処理されていない土師器坏である。9世紀から10世紀前半に帰属するものと考えられる。調整は、内外面ともに回転ナデが施され、内外面ともにミガキは認められない。

B250～292は、坏形を呈するが、その他の土師器坏とは異なり、厚手で胎土が粗く砂粒を多く含む特殊な土師器坏の一類である。この胎土の特徴は供膳具よりも壺など煮沸具にみられる胎土に酷似する。製作にロクロの使用は認められない。規格性に乏しく、大半の個体は外面にヘラケズリが施される。中にはB260のように外面にミガキが施されるものもあるが、大半は粗いヘラケズリと不定のナデで仕上げられている。口縁部はいずれもヨコナデによって口縁端部が細く尖る形状である。しかし、口縁のラインは水平を損ねたものが多くあり、器形も全体的に歪みが大きい傾向である。底部は平底

を指向しているが、平坦ではない個体も見受けられ、ここにも粗雑さが具現化している。用途は不明であるが、坏形を志向していることから坏の代用品であると思われるが、炭化物の付着や被熱して変色している個体も多く、カマド内で支脚として使用された経験が考えられる。宮古市内の他遺跡でも出土例は少ないようであり、宮古市島田II遺跡で同様の土師器坏を2点確認できる程度である。この遺跡特有の土器であると言うことができ、「田舎型土師器坏」と仮称する。現段階では、共伴する遺物より9世紀代の帰属が想定される。

B293～323は、須恵器坏である。8世紀代の1点を除いて、残りすべて9世紀代に帰属するものと考えられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りに分けられる。回転ヘラ切りは土師器には認められない点でこれら須恵器坏と異なる。また、県内では回転ヘラ切りが多用されるのは、9世紀前半代であるため、これらもこの時期に比定されるものと考えられ、矢巾町徳丹城跡の時期に比定される。瀬谷子窯跡など主要生産地で生産され搬入されたものであると推測される。なお、B323は1点のみ底部不定方向のヘラケズリの須恵器坏であり、浅く広い口径のものである。淡い乳白色を呈し、軟質であることからやや焼成不良であるとみられる。この出土須恵器坏1点のみ8世紀後半のものであると考えられる。

B325～351は、有高台の土師器供膳具である。B324のように稜榎とみられる特殊な器形以外は、概ね坏と皿に分類できる。稜榎模倣と思われるB324は比較的高い高台を有し、体部中位に明瞭な屈曲がある。金属器稜榎の直接的な模倣ではなく、金属器稜榎を模倣した施釉陶器や須恵器などをさらに模倣したものであると推測される。非常に出土事例の少ないものであり、城柵や官衙に接点を持つ集団の存在を示唆している。坏は直線的な体部のものと丸みを有するものがある。丸みを有するもの多くは口縁端部が外反する傾向である。B360～362・359～366は有高台の皿である。岩手県沿岸地域では出土事例が少なく、他地域からもたらされた土器である可能性が考えられる。しかし、B360は内面のミガキが放射状ではなく、一考の余地がある。

B367～369は耳皿である。いずれも内外面ともにミガキ・黒色処理され、B367は焼成後の穿孔が7箇所認められる。B367・368は貼り付けの高台があるが、B369は無高台の厚底形である。

B370～398は非ロクロの土師器供膳具である。土師器坏と高坏に分けられる。概ね7～8世紀に帰属すると考えられる。B370～394は坏である。内面ミガキ・黒色処理されたものと内外面ミガキ・黒色処理されたものと両方存在する。胎土は精良なものが多く、いずれも焼成良好である。B395～398は高坏である。B395・398は透かし孔がないものの円柱状の脚部が特徴的であり、東北地方南部にみられる形態である。

B400～410は土師器鉢である。ロクロによる回転ナデが施されるものと非ロクロのものがある。前者は内面ミガキ・黒色処理されるものが大半であり、後者は施されない。時期は前者が9世紀代、後者が7～8世紀であると推測される。体部下半に回転ヘラケズリが施されるものは9世紀前半のものである可能性が高い。

B411～714は土師器甕である。非ロクロのものが大半を占めるが、ロクロによる調整が施されるものも含まれる。これらロクロ製土師器甕（B655～667）は岩手県沿岸地域ではほとんど出土しないものであり、外部から搬入されたものである可能性を指摘できる。B668～714は7世紀後半～8世紀後半にかけての土師器甕である。底径が小さく、口縁が大きく開く形態は地域的な特性を備えている。また、ミガキが多用される個体も多い傾向である。なお、9世紀前半いっぽいまで旧来の形態が残存するのも地域的な特徴の一つである。

B715は土師器瓶である。直線的な体部で底部はない。1点のみであるが、この器種も岩手県沿岸地

域では希有な存在である。

B716～722は須恵器を模倣したような土師器壺類である。器面調整にミガキが認められ、黒色処理されている。須恵器貯藏形態の不足を補完する器種であると考えられる。B718のように底部に糸切りが残るものもある。

B723～753は土師器壺である。丸みを持つ体部に括れた頸部、開いた口縁部である。細かなハケ調整もしくはミガキが施される。これらは大・中・小の別がある。B753は把手状に双耳の付く特殊な壺である。

B754～804は須恵器壺である。頸部や口縁部の形態から長頸、広口、直口などの細分可能である。長頸のものには高台付の製品が多い。

B806は須恵器平瓶であると思われる。色調や胎土から湖西窯産の搬入品であるとみられる口縁部は残存していない。自然釉は緑色で肩部と内面に認められる。内面にある自然釉の位置からこの形態を導き出した。また、底部付近の器壁が薄くなるのも特徴的である。

B807～819は須恵器壺である。大容量のものが多く認められる。頸部に波状文が施されるものもあり、これらは8世紀～9世紀初頭までの製品である可能性が高い。B809は奥州市瀬谷子窯跡産の大甕である（伊藤博幸氏のご教示による）。B818は体部に平行する2条の沈線が施される。

土坑出土土器（第263図、写真図版234・235）

B820～839は、土坑より出土した土師器・須恵器である。器種組成に住居出土品と変わりない。B827は高坏であり、透かし孔はないが、円柱状の脚部である。東北地方南部からの搬入品であると考えられる須恵器大甕の中には圓線や波状文が頸部にみられるものもある。B846は須恵器長頸壺の体部片である。胎土・色調が特徴的であり、会津大戸窯跡産の製品である可能性が考えられる。

その他の遺構出土土器（第264図、写真図版235～237）

B840～876は、竪穴住居・土坑以外の遺構から出土した土師器・須恵器である。おもに溝出土のものが多い。B843は小形のロクロ甕であり、9世紀前半のものであると考えられる。

遺構外出土土器（第266図、写真図版237～244）

B877～1040は、他の時代に帰属する遺構内に混入した土師器・須恵器および遺構外より出土した土師器・須恵器である。B899・902は大振りな坏部の高坏である。B902は円柱状の脚部であると思われる。B954は土師器耳皿である。高台を有すると考えられるが、欠損している。B1028の須恵器壺は灰白色を呈し、回転ヘラケズリが施されている。県外の窯製品であると考えられる。

（6）古墳～飛鳥時代の遺物

土師器坏（第276図、写真図版244）

B1041は土師器坏である。比較的厚い器壁であり、体部と口縁部の境には明瞭な稜が認められる。外面は不定方向のヘラケズリ、内面はミガキ・黒色処理されている。東北南部でみられる7世紀前半頃の土師器坏に酷似する。

須恵器坏蓋（第276図、写真図版244）

B1042は須恵器坏蓋（飛鳥藤原京分類の杯Hに相当）であると考えられる。内外面ともにロクロによる回転ナデ調整が施され、外面上部にはやや弱い回転ヘラケズリが認められる。口縁部と体部を分かつ稜はやや緩慢さはあるが、外形線の変化点は認められる。内面中央部には1回のみ最終的なナデがみられ、このナデの存在から杯Hであると推測した。青灰色を呈し、外面に灰白色部分がわずかに認められる。焼成も良好である。6世紀末から7世紀前葉のものと考えられ、復元径は最小となる時期

よりも大きく、より古墳時代的な寸法であるとみられる。陶邑編年ならばTK217段階、飛鳥藤原編年ならば飛鳥I段階、新しくみても飛鳥II段階までの時期に収まるものと思われる。他地域から持ち込まれた須恵器であると考えられるが、精良な胎土、良好な焼成などの特徴から関東以西産の可能性も考えられる。

埴輪(第276図、写真図版277)

J23・24は、埴輪片である。土師質に焼成されており、内外面はハケ調整が認められる。J23は突帯がほとんど残存していないが、突帯下端のナデと思われる痕跡が明瞭に認められる。J24は突帯が剥がれ落ちた痕跡が認められる。これは焼成時の火回りの悪い帶状痕跡である。これら2片は、ハケの工具が異なるためそれぞれ別個体であると考えられる。径を示す彎曲と比較的薄い器壁から小径の製品であると推測される。円筒埴輪なら小形のものであると考えられ、形象埴輪の可能性もある。いずれも他地域から到來した遺物であると考えられるが、その由来は不明である。他地域から搬入された何らかの器物に紛れ込んだものと推定でき、これら自体に明確な意味があったとは考えられない。

(7) 金属製品

金属製品(第277~284図、写真図版281~288)

G35~109は出土した古代に属すると思われる金属製品である。鉄製品は鉄鎌・刀剣などの武器類、鎌・鋤先などの農工具類、これらに加えて紡錘車・刀子類・錫杖形鉄製品などがみられる。

G35~47は刀子である。形状は様々である。G36は1点のみ柄部に目釘孔が認められる。G43は柄部金具および木質が残存している。

G48は祭祀遺構より出土した馬鎌であると考えられる。断面長方形で、頭部がやや大きく作り出されている。先端部は欠損する。鍛造であるとみられる。県内の類例はないものと思われる。

G49は祭祀遺構より出土した刀である。柄部には目釘孔が認められる。刃部と柄部は角度が異なる。

G50は馬具の鎧吊金具の一部であると思われる。形態から手鎌にも似るが、刃部が無く、丁寧に方形板状が作り出されている。この金具部分が対となって鎧を挟み込むように取り付くものと思われる。

G51は方頭太刀である。柄部は折れているが、完存するものとみられる。刃部と柄部の角度が異なり、境界には鐸が残存する。柄頭は隅丸で、目釘孔が認められる。

G52~55は鐸である。いずれも長楕円形を呈する。G55のみ銅製である以外はすべて鉄製である。

G56は刀剣の柄頭である。木質が残存し、目釘位置で折れている。断面楕円形、簡素な形態である。

G57~75は鉄鎌である。五角形鎌が多く、孔がみられるものも多い。単孔式よりも双孔式のものが多い傾向である。G57・58・74・75のように長頸鎌もあり、G75は整矢鎌であると考えられる。

G76~G80は鉄製の鋤先である。大半が「U」字形を呈するが、G77のみは刃部の屈曲角度が強い。

G81~86は鎌である。基部には捻りがあり、木製の柄に装着されたものと考えられる。装着角度は不明であるが、捻りと刃部角度は多様である。

G87~89は手鎌であると考えられる。両端に孔があり、刃部を有するものであると想定される。

G90は鈎状の3本のまとまりである。3本まとまって使用されていた可能性が考えられる。

G91は絞具である。金具はすべて残存する。

G92・93は不明鉄製品である。G93は環状を呈し、G93は板状を呈する。G93は中央に円孔があり、端

部にはリベット状の小金具が認められる。

G94～98は鉄製錐車である。円盤と軸棒からなり、円盤は薄い板状である。ただし、G97は円ではなく方形である可能性が考えられる。

G99は鏃である。両側に刃部を有し、刃部中軸には鏃があり、緩やかに彎曲する。

G100は楔状の鉄製品である。断面方形で先端が尖り、頭部は彎曲する。船釘のような形態である。

G101は鈎状鉄製品である。基部は平板状で先端に向け緩やかに彎曲する。先端は尖り、逆刺が付けられている。漁具の可能性も考えられる。

G103は板状鉄製品である。用途・機能は不明である。古代の所産ではないかもしれない。

G102はSI427埋土下層より出土した銅椀である。椀としたが、浅い器形であると推測される。口縁径は復元すると21.4cmである。浅いことから蓋である可能性も考えられる。いずれにせよ、底部あるいは頂部に該当する部分が欠損しているため不明である。口縁直下の内面には、一条の巻線が巡っている。全体的に緑青で覆われているが、器表面の状態は良好である。9世紀頃と考えられる堅穴住居より出土した。なお、この銅椀内部に残存していた炭化物は年代測定の試料としたが、測定結果の示す年代は共伴遺物と齟齬がある。詳細については自然科学分析を参照されたい。

G104～109は錫杖形鉄製品である。小鉄鐸が取り付き、小鉄鐸は羊角状の頭部に円孔を介して直接つり下げられる。

(8) 古代以降の土製品・石製品

土玉 (第285図、写真図版275)

J1は、SI402床面直上出土の土製の玉である。短い円筒状を呈し、細い円孔が貫通している。表面は焼成前にミガキが施されていると考えられる。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。帰属時期は不明であるが、9世紀の土器類と共に作成している。

土鍾 (第285図、写真図版275)

J2はSI403北煙道埋土出土の土鍾である。外形に丸みを有する筒状形態である。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。帰属時期は不明であるが、9世紀の堅穴住居より出土している。

管玉 (第288図、写真図版275)

H2～4は石製管玉である。H2はSK202埋土下層出土で、碧玉製であると考えられる。濃緑色を呈し、片面穿孔手法で製作されている。そのため孔は、中心を捉えておらず、貫通孔片側は大きく端に寄り、その到達点を少し打ち欠いて貫通孔としている。色調および穿孔手法から出雲地方の玉作り工人が関わっている可能性がある。出雲花仙山産の碧玉を素材とした片面穿孔式の管玉であると想定される(廣瀬時習・大賀克彦両氏のご教示による)。一方、H3・4はH2に比べ細い管玉で、両面から穿孔されている。色調もやや淡緑色である。H3はSD201埋土、H4はSI1726埋土下層よりそれぞれ出土した。

平瓦 (第285図、写真図版275)

J3は堀1埋土上層より出土した平瓦である。古代の瓦は、岩手県沿岸地方では唯一の出土である。凸面には網目のタタキが深く刻まれ、凹面には布目が認められる。須恵質に焼成されており、凹面には自然釉が厚く掛かっている。この自然釉は焼成時に生じたと思われる亀裂や破断面に及んでおり、さらには布目のある凹面にまで到達している。すなわち、焼成時に裂傷が生じ、裂傷部から自然釉が流れ込んだ不良品であるとみられる。瓦の特徴から奥州市江刺区瀬谷子窯跡産で、胆沢城創建期の製品である可能性が高い(高橋千晶氏のご教示による)。したがって、この平瓦は、建物の屋根に用いるために持ち込まれたのではなく、瀬谷子窯跡より須恵器を搬出する際に紛れ込んだものと考えられる。

土製糸巻（第285図、写真図版275）

J4は、SI205の床面直上より出土した鼓形の土製品である。用途不明であるが、形態から糸巻ではないかと推測した。ただし、中央に孔がみられないため、その他の機能を有する可能性も考えられる。焼成良好で橙色を呈する。

石製紡錘車（第285図、写真図版275）

H5は石製の紡錘車である。中央には円形の貫通孔が穿たれている。外形が変化する箇所では面取り成形の痕跡を残しつつ、全体的に製作時の細かな研磨擦痕が認められる。

土製紡錘車（第285・286図、写真図版275～277）

J5～20は、土製紡錘車である。扁平な円盤形態のJ20を除き、断面台形、上下面円形を呈する紡錘車である。中心部に貫通する円孔が焼成前に穿孔されている。これらのうちJ7のみ上面に内側が凹むような明瞭な段差が作り出されている。J8は測縁部に沈線状の刻みが格子目状に施されて周全する。J20は中心部に円孔を持つ扁平な円盤形態である。円盤の片面には焼成前に施された沈線が放射状に認められる。この沈線は、円孔の位置を導き出す求心のためのものである可能性が考えられる。この1点のみ薄い円盤状で形態が異なり、作りも稚拙であるため弥生時代の土製紡錘車である可能性も考えられる。

羽口（第286図、写真図版277）

J19・22は、フイゴに装着された羽口である。いずれもSI441カマド芯材に用いられていた。円筒形を呈し、J21は先端部、J22は基部で端部はわずかにラッパ状に開く。両者は元々同一の製品であった可能性も考えられる。

砥石（第287～289図、写真図版278～280）

出土した砥石のうち36点を抽出、掲載した。H6～41は石製の砥石である。石材は乳白色のデイサイトの割合が多い傾向があるが、砂岩製の砥石も散見される。形態は角柱状形態のものが主体であるが、平板状形態の砥石も散見される。最低でも1側面に研磨使用による擦痕が認められ、大半が長軸方向に研磨擦痕が連続する。中には、細かな擦痕のみならず、研ぎ傷が明瞭に刻まれている砥石もある。出土した砥石の大半が消耗しており、可能な限り砥石として使用されたようである。砥石のみでは時期判断できないため、古代以降の砥石として一括で扱った。中には、中世あるいは近世のものも含まれている可能性も考えられる。鉄製利器刃部の研磨に用いられた砥石であると思われる。

(福島)

5 弥生時代・縄文時代後晩期の遺構と遺物

弥生時代は中期を中心に遺構および遺物が調査区西側で認められる。沖積層の堆積が落ち着き、地表面が再び安定した最初の遺構・遺物がみられるのは、この時代である。特に弥生中期は、住居と考えられる遺構も存在するため居住域であったと推測される。また、遺構はみられないが、調査区東側では古代の遺構の調査中に弥生前期の土器が少量混じることがあった。

その下層に縄文時代後期および晩期の遺構は認められないが、少量の土器片が出土している。これら土器片は調査区西側の沖積作用によって堆積した地層に少量紛れ込んだものと考えられる。

(1) 弥生時代の遺構**弥生住居1（第128図、写真図版98）SIY1**

調査区西側に位置する。不整な多角形を呈するが、古代の住居（SI712）に切られる。埋土は基盤

となる層と区別が困難であるが、わずかに炭化物が散在する。浅い掘り込みではあるが、床面で弥生土器がまとまって出土した。また、埋土より動物形土製品頭部片が1点出土した。炉など住居に付属する施設は検出されなかった。出土遺物から弥生時代中期の竪穴住居であると考えられる。

弥生住居2（第128図、写真図版98）SI735

調査区西側に位置する。平面形態は不明瞭である。古代の住居（SI708）に切られる。床面と思われる面で地床炉であるとみられる焼土を検出した。また、その周辺の堆積土を薄く剥ぐと柱穴が4個検出できた。これらは明らかに古代～中世などの柱穴のように上面から切り込まれているものとは異なり、埋土と基盤層の区分が困難である。このことから、より下位面の弥生時代の柱穴であると判断した。周辺より弥生中期の土器片が少量出土しており、この時期の住居である可能性が考えられる。

弥生住居3（第128図、写真図版99）SI723

調査区西側に位置する。古代の遺構調査中、検出した石圍炉である。不揃いの亜角礫が円を描くように全周する。検出面は縄文中期の遺構面に到達していないことから弥生時代の石围炉であると考えられる。周辺にある柱穴のうちいくつかはこの炉に伴うものである可能性も考えられるが、取捨選択できなかつた。

弥生土坑1（第128図、写真図版99）SK716

調査区西側に位置する。古代遺構面よりわずかに下位面で検出した。平面略楕円形であり、丸みを持ちながら楕形となる断面形である。最下面北側では焼土が認められる。埋土下より弥生土器が出土した。弥生中期中葉から後葉にかけての土器であり、土坑の時期も同様であると推測される。

（福島）

（2）弥生時代の遺物

弥生土器（第290～294図、写真図版260～264）

C1～120は弥生土器である。弥生時代中期中葉から後葉に帰属する土器が大半を占めるが、前期や後期の土器片も少量出土している。また、東北地方各地の特徴を備えた土器が一定量認められ、これらの多くは胎土やその特徴から搬入品であると判断される。C1は頸部が屈曲し、口縁部が開く壺である。体部上半には大きな「Z」字形の区画があり、その区画を縄文が充填されている。C2は壺で、口縁部に突起と刺突があり、体部は沈線で区画内を刺突列によって充填されている。C3は頸部が極度に括れる壺の口縁部片である。口縁部外面には多重の沈線が巡り、口縁端部は丸く肥厚し、刻みが巡る。同様の刻みは頸部にもみられる。C4は壺の肩部付近の破片であると思われる。沈線で区画された磨消部と充填縄文が展開する。C5は口縁部片である。沈線による文様が横位に巡る。C6は壺の口縁部片である。口縁端部外面には刺突列を伴う貼付隆線が巡る。肩部には沈線が認められる。C7は外傾する口縁部に無文帶と地文帯が上下交互にみられる。C8は壺の肩部付近であると思われる。沈線で区画された矩形の区画を植物の穂先のようなものによる刺突で充填している。C9は壺の口縁部片である。胎土に海綿状骨針が多く認められ、外面は縄文のみである。会津地方の南御山2式に相当する搬入土器である。C10は壺の体部片であると考えられる。平行する2本描きの沈線が大きな弧を重ねる。やはり会津地方の川原町口式に相当する搬入土器である。C11は方形四つ足を有する小形土器の底部片である。底部は方形を指向しており、植物を材料にした編み籠を模した土器であると考えられる。C14は壺の口縁部片である。口縁端部外面に刺突列を伴う貼付隆線が巡る。その直下には多重の沈線が水平方向に巡る。C15は壺の口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部外面および口縁端部は縄文が回転施文されている。外面頸部以下は沈線による重菱形文が展開する。秋田県

域の字津ノ台式に相当する搬入土器である可能性が考えられる。C17は交互刺突列が巡る破片である。後期天王山式相当である。C18・19はいずれも壺の体部片である。外面には多重の沈線が円形に配される。C18は1本描き、C19は2本描きである。東北地方南部の特徴であり、搬入品であると考えられる。C20はやや粗暴な沈線で多重の円文が描かれている。C21は細頸壺の頸部片である。口縁部と頸部の境界屈曲部には断面三角形の隆帯が巡る。隆帯直下には2本一対の沈線で多重の矩形文様が展開する。胎土には海綿状骨針が多く認められる。その特徴から十三塚式や桜井式と呼称される東北地方南部からの搬入土器である。C22は沈線と繩文が認められる。口縁部は波状であり、頸部は「く」の字形に屈曲する。区画内部は部分的に繩文が磨り消されている。C24は磨消繩文に区画外部繩文の上からに連続する縱方向の刻みが認められる。C25は区画を持つ沈線と磨消繩文である。繩文後期の土器の可能性もある。C26~28は平行する沈線で区画された範囲に交互刺突が連続する。弥生時代後期の天王山式~終末期の赤穴式にかけての土器であると考えられる。C32口縁部に無文帯が巡る。頸部は「く」の字形に屈曲し、体部はやや丸みをみせる。体部には沈線で幾何学的に区画された磨消部が認められる。C33は平行する直線の沈線と波状沈線がそれぞれ巡る。津軽垂柳3式に相当すると考えられる。C34は複数の沈線が巡り、大きな波状と直線である。高坏や器台の脚部の可能性もある。C35は口縁部に上下直線の沈線が巡り、その間に波状沈線が巡る。内面にも上下2条の沈線が施されている。沈線直下は無文帯である。C39は横方向に間隔密な直線の沈線が幾重にも重なる。肩部付近では1条の波状沈線が認められる。C43は頸部に沈線で区切られた無文帯を持ち、屈曲外傾する口縁部と丸みを有する体部には繩文が施されている壺である。C45は多重の沈線と刺突列が巡る。C44は口縁部片であり、内外面に小波状の沈線が巡る。C47・48は蓋の可能性が考えられる。C47は端部外面には刻みが巡る。C49は器表面の剥落が著しい。屈曲する口縁部を持ち、口縁端部には繩文が施されている。体部は沈線と磨消繩文である。C50・C59はいずれも胎土に海綿状骨針を含み、搬入された土器であるとみられる。外面には多重の沈線が梢円形に配される。多重沈線による梢円間の接点では水平方向の短い沈線で接続される。沈線は一本描きであり、仙台平野以南の中期中葉の特徴である。C51はシャープな水平方向の沈線が巡る。破片では行方がわからないが、沈線はクランク形となる可能性が高い。仙台平野以南の中期中葉の特徴である。C54は赤彩された土器である磨消部には沈線が多重に巡る。沈線は直線と波状のものがある。C55は底部方形の小形台付甕である。口縁部は波状で、外面には沈線と磨消繩文が認められる。底部には4箇所に丸い脚部が付き、うち2箇所は対方向で穿孔されている。C57は口縁部に2重の沈線で弧状が連続する文様を有する。C58は沈線によって区画される「Z」字形の磨消繩文である。C56は蓋天井部の可能性が考えられる。C61・63・64は高坏である。いずれも精良な胎土が特徴的である。沈線はよく明瞭である。出土した中期の土器群中ではやや古相となると思われる。C66は器形の丸みから壺体部片であると考えられる。区画内部は通常の繩文と異なっており、植物の穂先などの連続刺突かもしれない。C67は小形の壺口縁部から体部上半の破片である。頸部には沈線で口縁部の無文帯と体部の文様帯に区分される。体部文様帯は沈線と刺突列を組み合わせたものである。C70は蓋天井部片であると考えられる。C71は繩文が施され、頸部のみ無文帯が巡る。無文帯と有文部を隔てる沈線が認められず、境界不明瞭である。C73は高坏などの脚部片である。4方向から焼成前穿孔がなされている。C74は底部方形基調の小形台付甕である。底部には4箇所に小さな脚部が付き、うち2箇所は対方向で穿孔されている。C75は高坏であると考えられる。沈線が多重に施されている。C79は高坏の坏部であると思われる。外面は磨消繩文が展開する。C77は短く屈曲する口縁部である。口縁部は内外面ともに文様が施されており、加えて赤彩されている。C84は沈線による梢円形の文様が配されている。東北地方南部からの搬入品の可能性が考え

られる。C91は精良な胎土の小形器種であると考えられる。外面には沈線による重菱文が展開する。口縁端部には刻みが連続し、重菱文直下の刺突列と対応して配されている。C98は底部方形の小形台付壺底部片である。一角が欠損しているが、底部には4箇所に丸い脚部が付き、うち2箇所は対方向で穿孔されていると推測される。外底面には脚部を直線で繋ぐように沈線が施されている。C101は交互刺突が2段確認できる。後期天王山式相当である。C104・109は一本描き沈線による矩形の文様が展開し、東北地方南部の特徴である。C108は縄文を磨り消すことなく多重の沈線を巡らせる。沈線は2重の連続山形のものが直線の沈線を上下で挟む。津軽地方の土器の特徴を備えている。C110は沈線による多重円文になるものと思われる文様が展開する。東北地方南部の十三塚式に相当する搬入品である。C113・114・120は沈線区画内部を刺突・刻み・短沈線などで充填された土器である。いわゆる川岸場式の特徴であると考えられる。C121・122はいずれもミニチュアの土器である。胎土等より弥生土器の可能性が考えられる。

大陸系磨製石器（第358～361図、写真図版314～317）

1～3は小形の扁平片刃石斧である。大陸系磨製石器の一種であり、鑿として使用されたものと考えられる。K14は基部に抉りを有しない柱状片刃石斧である。基部は斜めに成形されている。濃緑色の北海道アオトカラ石製であり、側面に擦り切り痕が残っているため擦り切り技法によって製作されている。K15・19は太形船刃石斧であると考えられる。いずれも断面梢円形であり、稜線が不明瞭である。K17・33は扁平片刃石斧である。K33はアオトカラ石製であるとみられる。擦り切り技法によって成形されている。K23は蛇紋岩製の柱状片刃石斧であると考えられる。

石器（第377～379図、写真図版330～332）

縄文時代の石器と区別が難しいためまとめて掲載したが、K174・184などの石鎌は弥生時代に特徴的な石鎌であると考えられる。K249はいわゆるアメリカ式石鎌である可能性が高く、弥生時代の石鎌であるとみられる。

土製品（第294図、写真図版265）

J25は不明土製品である。残存部上下の端部は丸みを有しており、楕円の形態に近くようである。このことから、特殊な土器の脚部である可能性が考えられる。下部には貫通孔があり、透かし孔である可能性が考えられる。扁平な形態の表面には沈線と縄文によって施文されている。J26は動物形土製品であるが、土器の獸面突起部分である可能性もある。突き出た耳と鼻の表現によって形作られており、背面や側面には沈線が刻まれている。イヌ、クマ、キツネなどが候補として挙げられる。J27も動物形土製品である。獸脚部分であり、わずかに縄文が確認できる。J28は円盤状土製品である。文様意匠から弥生時代のものであると推定した。中央部は表で隆起しており、隆起した頂部には深い刺突が1箇所認められる。円盤側縁に近い部分には一対の小貫通孔がある。

（3）縄文時代後晚期の遺物

D1～6は縄文時代後期の土器である。D1は大洞A式相当の深鉢であるとみられる。D2は多重の沈線によって文様が展開する。大洞C2段階に相当するものと考えられる。D3・4は注口土器の注口部分である。D5は口縁部文様帶に流麗な文様が展開する深鉢である。大洞B式に相当するものとみられる。D6は横方向の沈線が複数巡る。

D7～9は縄文時代後期の土器である。D7は細い隆線に細かな刺突が伴う。D8は後期初頭あるいは前葉の深鉢であると考えられる。口縁部は大きな波状で、太い沈線によって区画された磨消縄文が展開する。D9も後期初頭あるいは前葉の深鉢であると考えられる。口縁部は大きな波状で、口縁部